

SCP小説【平行世界？え、収容していない？】

カクユキ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

Dクラス職員である主人公。

ある実験により平行世界に飛ばされてしまう。

「え、SCPを収容していない?」

「え、keterクラスも普通にいる?」

果たして主人公は生き残れるのか・・・

本部URL <http://www.scp-wiki.net/the-things-drbright-is-not-allowed-to-do-at-the-foundation>  
日本支部URL <http://ja.scp-wiki.net/the-things-drbright-is-not-allowed-to-do-at-the-foundation>

SCP Foundationはクリエイティブ・コモンズ表示継承3.0ライセンス作品です。(CC-BY-SA3.0)

まあ、基本はのんびりしています。

## 目次

はい！今日も実験ですね！	1
え、逃げていい？あ、ダメか	3
実験開始！ふむ、これヤバくない？	8
平行世界だって！H A H A H A馬鹿野郎！！	12
とりあえず、出会ったら殴りましょう	16
財団がない？OKちよつと現実を見ないわ	20
入学式、それは黒歴史の始まり	23
先輩だろうが、関係ない！	27
とりあえず嫌がらせをやりましょう	31
友達（裏切る予定）ができました！	36
猫か…よし逃げるか	40
ニヤーニヤー（遠い目）	46
わお！イナミさん！	53
ちよつ、削ったらダメでしょう！！	58
てめえは俺をおふつ？	63
カチカチカチカチカチ……	68
見られた……だと	72
修羅場……さらば！！	76
男子はかつこいい物には目がない！JKは知らん	80
H A H A H A、トマトじゃーん	84
同類……居たんだ	91
とりあえず、言い訳ください	99
こつちに投げるなあああ！！	107

はい！今日も実験ですね！

「・・・ろ・・・きろ・・・起きろ、D-4539」

俺の部屋に無機質な声がスピーカーから響く

「・・・ふう、D-4539、今起きたよ」

「そうか、では朝食の為、食堂に集合だ。なお、遅れた場合、それ相應の罰が降るので気をつける事だ」

そう言うのと、スピーカーから音は消えた。

俺はベットから体を起こし、顔を洗う事にした。

顔を洗い、鏡で自分を見る・・・

「ふっ、いつ見ても酷い顔だな・・・」

そう言い、俺は食堂に向かう為、部屋を出た。

ここは【SCP財団】

ここでは、地球上の異常な物品、存在、現象を確保、收容、保護を専門として活動している財団らしい。

まあ、詳しい事までは知らないが・・・

ちなみに俺はDクラス職員であり、死刑囚である。

この財団は、SCPの実験は、基本的にDクラス職員にさせている。

まあ、いつ死んでもおかしくない所だしな。

しかし、そんなDクラス職員も希望はある。

Dクラス職員は、1ヶ月間の勤務で釈放されるといふ条件がある。

実際に釈放されるかは、別の話だが・・・

(まあ、俺はそろそろ1年だけどね・・・)

そう、俺はとある事情の為に普通のDクラス職員より長期で勤めているのである。

とは言っても、そこまでSCPについて詳しい訳でもない。

担当したSCPについてしか知らないのだ。

このSCPがどこで見つかり、何故このようになったのかまでの詳細は全く分からない。

まあ、たまに資料を読まされる事もあるが。

まあ、言えることはいつ死んでもおかしくないそのことだけだ。

そんなことを思いながら、この長い廊下を歩き続けた。

「食堂」

「相変わらずだな……」

ここは食堂である。

とは言っても、ほとんどがやる気ないDクラス職員達だ。

まあ、ここで働いていればそうなるのが普通だ。

なにせ、明日は我が身なのだから。

そう思いつつ、俺は席に座り飯を食う。

ちなみに、飯はパンにスープである。米がないのは少し寂しいが

……

日本人の俺からしたら、米も是非とも追加して欲しい物なのだが……そんな事を考えながら食事をしていた。

しばらくすると、扉が開き白衣の男が2〜3人の警備員を引き連れて出てきた。

この白衣の男こそ、SCP財団の正社員である。

彼らは、SCPの生態の解明を主な活動としている。要は博士だ。

「おはよう諸君。今回の担当をする者だ。名前は……まあいいだろう。では、今日の実験についてだが……」

そう言い、資料を配る。

一人一人に様々な資料が渡る。

今日も実験<sup>地獄</sup>が始まる。

「ちなみに、D-4539は別の実験だからな」

「え」

本当に嫌な予感しかしない……

え、逃げていい？あ、ダメか

はい!!Dクラス職員のD―4539だよ☆

さてさて、いきなりだけど問題だよ！私は今どこに向かっているでしょうか？

正解は……………

「なんで、カナダなんだよ!？」

「うるさいぞ、D―4539」

カナダでした。

――3時間前――

「では、実験だがD―4539、貴様には今からカナダに行ってもらおう」

「…はあ?…カナダ?」

「そうだ、カナダだ。よし、連れて行け」

そう言うと、警備員が俺を拘束し連れて行くとする。

「や、やめろ！HA☆NA☆SE!!」

イヤアアアア

――現在――

という訳で今現在、財団が所有している飛行機でカナダに向かって  
いるのだ。

「なあ、博士さんよ。今回のSCPについて説明を受けていないだが  
……」

「ふむ、そうだったか？まあ、いいだろう」

そう言うと、カバンから資料を取り出すと説明を始めた。

「今回はSCP―2503の実験をしよう」

「SCP―2503？聞いた事ないな」

「……続けるぞ。オブジェクトクラスはsafeだ。カナダにある住  
宅の2階の主寝室に存在しており、その扉を開くと薄暗く照らされ  
た空の下で一直線に伸びるコンクリートタイル製の小道が続いてる」  
ちなみに今更だがSCPは3つのクラスに別れている。

【safe】 収容可能：まあまあ安全

【euclid】 収容方法未確定：ヤバイ

【keter】 収容不可能：超ヤバイ  
になっている。

ちなみに、今回はsafeなのでラッキーではあるのだ。

「その空間では、加齢する事もなければ腹が減る事もないらしい」

「ふむふむ、それで」

「しかし、死ぬことはできるのだ」

「え、なんかいるのか？」

「違う。自殺はできるのだ」

「なるほどな、で今回の実験は？」

「今回はその空間内で生活をしてもらう。ただし、死なない条件付  
きだな」

博士が一通り説明を終えると、アナウンスが流れた。

〈カナダに到着しました〉

「よし、行くぞ。D―4539」

「了解」

俺は知らなかった。

そのSCPがただの小道だと思っていた。  
ただ、そこで生きれば良いと思っていた。  
そう…無限に続く小道だとは知らずに…

――移動中――

「着いたぞ。D―4539」

「…うん、やっぱり普通の住宅だな」

そう、見た目は普通の住宅だが、ここの2階がそうなのだろう。  
住宅の周りには、テントがあり、他の博士、または警備員がいる。  
俺と博士は、そのテントに向かって歩いた。

「すまない、遅くなった」

「おお、○○博士ではありませんか。お、こちらが例の噂のDクラス職員ですかね？」

「ええ、そうです。おい、挨拶だ」

「ういつす。どうも、Dクラス職員のD―4539です」

「ほほう、よろしく頼むよ。私は××博士だ。まあ、覚えなくていいがな」

そう言うと、××博士は俺に握手を求めた。

俺は、握手を握り返そうとすると、○○博士が止めに入った。

「××博士、そんな事より準備は大丈夫ですか？」

「…ふむ、まあ良からう。準備は出来ておる。いつでもいい」

「了解しました。おい、行くぞD―4539」

「あ、ちよつと待てよ」

そうして、テントから出ていった。



「……ふむ、彼がSCP-914-1か。面白いな」

ー報告書ー

SCP-2503

【推定距離：9216年】

オブジェクトクラス：safe

当SCP発見時、一人のエージェントが入ったのち、扉が閉まりすぐに消失。

残ったチームが扉を開けるもエージェントは見当たらないという事象が発生しました。

彼は、無線機でチームと会話していましたが、すぐに通信が切れてしまいました。

また、ドローンを送り込んだが、未知の原因で停止してしまうまでの39時間の間機能を続けていました。

また、エージェントとドローンについての行方は、「ヘンリー・知らぬ」の日記で明らかになっています。

しかし、日記の内容から死体で発見されたヘンリー・知らぬはこの

世界の住人では無く平行世界のヘンリー・知らぬと考えられています。

この事から、SCP-2503は平行世界に行くための小道だと考えられます。

実験開始！ふむ、これヤバくない？

今、俺はリュックサックを背負い、住宅の前にいた。

「では、D-4539。今回の実験について説明をする。今回は飛行機で説明をした通りに生活をしてもらう」

「うーん、普通に生活をするだけなのか？通信機器はないのか？というか、何故日記を渡すんだよ」

「SCP-2503では、今までにドローン等を送り込んだが、途中で故障したという報告がある」

「ああー、なるほどね。いつも通りね」

そう、SCP内部で通信機器を通じないのは普通なのだ。

一応、通信機器を通じるSCPもいるが、基本は通じないとされている。

「一応、リュックの中には通信機器も入っている。日記については、まあSCP内部に入れば嫌でも日記は書くだろう」

「ええー、了解つと」(あ、これは何日もかかるパターンか。)

そう返事をする、博士と共に住宅の中に入っていく。

中は、意外と綺麗であり財団が綺麗にしているのだとわかった。

2階に続く階段に歩き、2階へと向かう。

そして、2階の扉の前で止まった。

「ここだ。この先からが先程説明をした空間になっている」

「ここが……」

「私は先にテントに戻る。入る合図に関しては、無線で送る」

そう言い、博士は2階から降りて行った。

それを確認し、リュックに入っている無線に電源を入れる。

ー待つこと3分後ー

『ザザザー、D-4539に告げる。実験を開始しろ』

「ふう、よし。行くか」

ここから先は未知数だ。財団の報告は聞いたが、それだけでは無い

と確信している。

理由としては、まあ勘であるが1年間働いた身とすれば嫌でもわかる。

この扉の先が……ヤバい事<sup>危</sup>が<sup>険</sup>。

だが、戻る事など不可能な話だ。逃げたところで、下にいる警備員に撃たれるか、確保されるかのどっちかだろう。

まあ、俺はSCP-923の実験によりそのSCPの能力を一部手に入れる事ができた。

まあ、使う条件があるし、何より疲れるので、あんまり俺は使わない。

そう考えつつ、扉を開けた…

――〇〇博士side――

「実験を開始しろ」

私は無線でそう伝える。

始まった。いや、始まってしまった。

この実験は、元々は反対だった。

もし、失敗した場合、我々は彼を失ってしまう。彼の能力は、非常に有効的な為、失った場合のデメリットが高いのだ。

『こちら、D-4539。中に入ったぞ』

ふう、こちらでも覚悟を決めるか…

――主人公(D-4539)side――

扉を開ける。

その先は、報告書通りの小道になっていた。中に入り、無線を使う。

「こちら、D-4539。中に入ったぞ」

『そうか。ちなみに扉は無くなっているな?』

「え」

俺は、急いで後ろを振り返る。

入った時にあったはずの扉が無くなっていた。

「……おい、聞いてないぞ」

『すまない、言い忘れていた』

「はあ!? いや、一番重要な情報だろうが! え、俺もしかして帰れない!?!」

『落ち着け、D-4539』

「いや、お前のせいだから!!」

『安心しろ。この道を歩けば、出口がある。それは検証済みだ。』

「はあ、諦めて歩くか……」

そう言い、俺は歩く。

そう歩く。

無限の道を……

――3時間後――

歩き続ける。そこに疲労はない。

だが、先が分からない道だ。

俺はストレスを感じ始めていた。

しかし、ここで異変が起きた。

「あ? どうなっているだ? これ?」

『どうした。報告しろ』

「…道がない」

そう、道がないのだ。

先程は、道があったのだ。

だが、この先は道がないのだ。

すると、この空間にノイズが走る。

「な!? 空間にノイズが!?!」

『何!? D-4539! 脱出は出来るか!?!』

「無茶だ! それはできない!!」

そして

「あ」俺は  
闇に消えた。

平行世界だって！H A H A H A 馬鹿野郎！！

――報告書――

Dクラス職員

D―4539について

当Dクラス職員は、SCP―2503の実験の途中で消失。

無線の内容には、空間にノイズが走った事がわかり、その後は不明。

Dクラス職員も行方は不明である。

今後の調査については、慎重にやるべきと考えられる。

レポート作成者：〇〇博士

――〇〇博士side――

「・・・まあ、レポートはこんな感じでいいだろう」

私は今、財団に戻っており、今回の実験についてレポートを制作していた。

しかし、あのDクラス職員を失ったのは我々にとって痛手だ。

彼の能力は、ちゃんとは実験していないため、能力は未知数だ。

：心配だ。なにせ、あの能力はk e t e rになる可能性を秘めているのだから。

「ふっ、まあ心配するだけ無駄か」

どうせ、向こうの財団に確保されている頃だろう。

そう思い、私はテーブルに置いてあるコーヒーを飲んだ。

――主人公（D―4539）――

「・・・い。・・・なさい。起きなさい！」

「うおっ！」

大きな声で、びっくりした俺は周りを見渡した。

見た感じ、ここは裏路地なのだろう。あっちこっちにゴミ等が散ら

ばっていた。

そして、目の前にいるのは財団が雇った警備員では無く普通の警察だというのがわかる。

「君、大丈夫かい？」

「あ、はい。大丈夫です」

「とりあえず、親御さんに電話するから、連絡先を聞いていいかな？」

「うん？いえ、自分の親はもう…」

「あ、すまないね」

うん？何故に子供扱いしてくるのだろうか？

「とりあえず、署まで来てもらおうか」

「あ、わかりました」

パトカーには【警察】と書かれていることから、日本だとわかる。

そこまでテレポートしたのか？

どちらにせよ、警察署に行けば警察の中に潜入している財団のエージェントに見つかって、財団に連絡が行くはずだ。

そう思い、パトカーに乗ろうとすると…

「うん？」

「どうしたんだい？」

「あ、いえ、なんでも…」

パトカーってこんなに大きかった？あれ？もしかして、これって…

俺は、パトカーの窓に反射した自分の姿を見て気づいた。

そう、若返っているのだ。

確か、23歳だったはずなのに、今の自分は15〜16歳になっていた。

「…ふあ!？」

「うん？早く乗りなさい。」

「え、あ、はい」

戸惑いつつも、パトカーに乗り警察署に向かった。

警察署に向かう途中で色々な質問をされたが、全てを答える事が出来なかった。

極めつけは…



『××ラジオから、本日2000年3月1日のニュースをお伝えします。』

「…え、今って20☆☆年7月25日じゃない？」

「え？」

「え？」

警察官と俺の声が、リリースする。

それもそうだ。つまり、俺は過去に来ているのだ。

「ははは、子供だからって適当な事を言うじゃないよ」

「え、あ、いや…」

「とりあえず、警察署に着いたから話はそこでね」

「あ、はい」

そう言い、パトカーから降りて警察署のとある部屋に入った。

「じゃあ、質問するね」

「はい」

「じゃあ、君の名前は？」

「えっと、D-4539です」

とりあえず、日本支部の財団にわかるように、Dクラス職員の名前を言う。

どちらにせよ、過去に来たことにより、空間に何らかの歪みが生じるはずだ。

それに気づかない財団ではないはずだ。

「いや、ちゃんとした名前をね」

「あ、いえ、なのでD-4539ですって」

そう言い続けていると、一人の警察官が入って来て、俺に質問していた警察官に小声で喋る。

…なんだろう、変に嫌な予感が

話を終えた警察官が俺を見てこう言った

「ねえ、君の戸籍がないのだけど……」

「え」

本来、Dクラス職員には様々な国で実験・調査する為に色々な国の戸籍を持っており、日本でも例外では無いのだ。

つまり……ここは……

「……平行世界かよ!？」

平行世界らしい(遠い目)

「えっと、大丈夫? 君?」

「大丈夫じゃないです」

どうしようか……

とりあえず、出会ったら殴りましよう

――数日後――

ワー、キヤーキヤー!

「元気そうだな〜」

窓から外で遊ぶ子供たちを見て言った。

あれから、俺は孤児院に入れられた。

警察からは、変な誤解を受けて「親が亡くなり、親戚に預けられるが虐待を受けた子供」となり、戸籍を作って貰った。

名前は「D-4539」から「取音<sup>とおとまわり</sup>廻」という名前になった。

それから、最初に言った通り孤児院に入った。

ちなみに、こっちに来る際に持っていた荷物は無くなっていた。

「というか、何故に財団からコンタクトがないのか…」

そう、日本支部の財団から未だにコンタクトがないのだ。空間に異常が発生した以上、そこを調べて俺を突き止めると考えたが、一向に現れる気配がないのだ。

「まあ、自由なのはいいことだけでも」

そう思いつつ、のんびりしていた。

「あ、廻お兄ちゃんも遊ぼう!」

「そうだよ!一緒に遊ぼうよ!」

「遊ぼ!遊ぼ!」

「仕方ないな〜」

そう言い、俺は外に飛び出した。

――2時間後――

俺は今、正座をしていた。

「廻、何度言えればいいのですか」

「えっと、その〜」

「子供たちと遊ぶのは、構いません。むしろ、こちらとしてはありがた

い事です」

「ですよね！」

「ですが、毎回毎回！泥だらけになってまで遊べという事ではありませんー！」

「ぐう！」

そう、俺は子供たちと遊ぶと泥だらけになって遊んでしまう癖？があるぽい。

「はあ、明日から新しい先生が来るというのに……」

「あ、そうなんです」

「ええ、なので今はその準備をしているというのに……」

俺がここに来てから、色々と忙しいらしいので新しく雇ったのだから。

「ちなみに、どんな人なんですか？」

「そうですね…なんでも元研究者であるみたいですが、様々な理由で先生になったみたいです」

「ふーん、そうなのかー」

「聞いたいてその態度ですか…まあ、いいでしょう。ご飯にしますよ」

「はいよ、手伝うよ」

「当たり前です」

そう言い、若干明日が楽しみであった。

――翌日――

「はははははは、初めまして諸君！私の名前はブライト！ブライト先生でもブライト博士でもなんでも呼びたヒデブ！」

「ちよ、廻君!？」

昨日の俺へ

楽しみにしていた気持ちは、別の意味でドキドキしました。

PS：【ブライト博士】と聞いて殴った俺は悪くない。

――数分後――

「ははは、初めてだよ！初対面で殴られるのはー！」

「いや、マジですみません」

あれから、俺は落ち着きやらかした事に気が付き謝っていた。

さすがに先生方も驚いたようで、動揺していたが

「虐待を受けていた人に似ていた」

という言い訳をした。

だとしても、殴らないけどな。

今は、空き部屋でに入り2人きりで話をしている。

まあ、何はともあれ本題に入るとしよう。

「ところでブライト博士」

「うん？なんだい？あ、もしかして私の実験についてかい!？」

「いえ、違います」

「ちえ、違うか」

「……財団からのメッセージは？」

そう言い、どんなメッセージがあるのかを確認する。

まあ、どうせ戻ってこいやDクラス職員を抹殺のどっちかだろう。

そう思いつつ、ブライト博士を見ると

「……財団？」

「え」

まるで分からないって顔をしていた。

――報告書――

ブライト博士

彼は財団で数々の問題行動を起こしている。

あまりにもおふざけが過ぎるためか、財団は「ブライト博士が財団で二度としてはいけないことの公式リスト」を作成して財団最高指揮官であるO5所属職員であるO5―6が「もしブライト博士が違法行為をするようであれば、誰でも気軽にリストに加える」と許可を出すレベルである。



「色々な理由って？」

「おっと！子供には話せない大人の理由さあ！」

「二ええー、ズルい!!!」

そんな感じで、歓迎会は進んでいった。

まあ、このままだとブライト博士はあっさりと馴染むだろうと思  
い、外を眺めていると……

「やあ元気かい？廻君？」

「うん？ああブライト博士か。大丈夫だよ。まあ、今のところは」

「ふむ、そうかい。ところで財団についてなんだが、一体何を研究して  
いた財団なんだい？」

「気にしないでくれ。あれは戯言だよ」

「：そうかい。ところで君は私の研究について知っているかい？」

「ああ、さつき子供たちに説明をしているのを聞いたよ」

「ふふふ、素晴らしいだろう！私の研究は詳しく説明をすると……」

あ、これ話が長くなるパターンだ。

そう思い、夜は更けていく……

――歓迎会終了後――

俺たちは、歓迎会が終了して寝室の布団で横になっていた。

財団がない世界。それならば、空間に異常があっても調べない辻褄  
が合う。

ならば、他のSCPはどうなっているんだ？

そう思いつつ、俺は眠りについた。

――翌日――

「学校ですか？」

「ええ、あなたの学校についてなんですけど、行きたい希望とかあります  
か？」

次の日、俺は先生に呼び出されていた。

そういえば、俺は今は15歳（結局15歳だった）なのだ。



つまるところ、高校に入学しないといけないのだ。

「行きたい所って言われても…」

「ええ、分かっています。いきなり、そんな事を言われてもって考えていると思いますが君の為なのです。」

「うーん」

「大丈夫です。ゆっくり考えて下さいね」

会話が終了し、俺は悩んでいた。

どうしようか、正直ここにもお世話になっているから学費は安いところがいいかな、等を考えていると…

「やあ、考えて事かい？」

「あ、ブライト博士」

「君の事だ、どうせ高校についてだろう」

「そうですね、ブライト博士は何処がいいと思いますか？」

「君、適当過ぎないかい？まあ、オススメはこの高校だがね！」

「パンフレット持つてるのかよ。用意周到だな」

そう言い、パンフレットを見ると孤児院から近く学費も安いとも書かれてあった。

まあ、ブライト博士が選ぶには結構普通の高校だった。

「廻君がここにお世話になっているから、学費がなるべく安いところにしてみたんだ！ちなみに、見学も1回行って見たんだが、いい高校だったよ!!」

「…ブライト博士」

……怪しい。怪しすぎる。

あのブライト博士が何故こんなにも優しい？なにか罠か？あの【ザ・問題児】が何を企んでいる？

そう思いつつ、俺はこの高校に決めたのだ。

この収等高等学校に

## 入学式、それは黒歴史の始まり

あれから収等高校に入学するための勉強をしていたが、なにせ2回目  
目の受験だ。

なので、普通に習った内容を思い出す感覚で勉強をしていた。  
他にも、ブライド博士がいるため、勉強が捗るのだ。

まあ、たまに変な実験器具を持ってきて怒られていたが……

まあ、そんなこんなで無事に入学も決定したのであった。

――入学前日――

「ふふーん」

「あ、廻お兄ちゃん嬉しそう！」

「明日から学校なんだって！」

「それじゃあ、私と遊べないの？」

「え、それは嫌だ!!」

「大丈夫だって、学校から帰って来たら一緒に遊ぼうな」

「うん、わかった！」

ああ、癒しだな。普通に子供だから純粹なのだ。

ちなみに、ロリコンでは無いからな。

特にドアの隙間から覗いてるブライト博士！おい、どこに連絡しようとしてやがる！やめろ！逃げるな！

あの博士、速攻で逃げやがった。後で潰すと心に誓っていると

「大丈夫？廻お兄ちゃん？」

「あ、わかった！一緒に眠ろうよ！」

「ええー、ズルいよ！私が一緒に眠りたかったのに!!」

なんか喧嘩が始まりそうだったので、皆と一緒に眠る事を約束して  
先生のところに向かった。

「先生、明日から入学式ですね」

「ええ、そうですね。あなたが来て早数ヶ月、色々とお世話になりましたね。……ロリコン」

「ええ、そうですねってロリコン!? さりげなく貶された!」

「まあ、ここから通うみたいなので別れではないですがね。……ペド  
フィリア」

「やっぱり、貶されている!? なんですか! 嫌がらせ!? というか、仮にも先生でしょう!」

「私はあなたの保護者の立場なのです! 間違った道に行かせない立場  
なのですよ! ロリーター!」

「誰がロリーターだ!! ていうか! ロリコンじゃないからな!」

「嘘です! ブライト先生が言っていましたよ! 子供たちを手玉に取っ  
ているって!」

「言い方!? ブライト博士、あいつぶっ潰す!!」

「あ、コラ! 待ちなさい! 話は終わっていますよ!!」

こうして、夜は悲鳴と共に更けていく。

エ、ヤメルンダ!!

ギャアアアアアア!!!

――入学式当日――

「久しぶりだな、制服だなんて。着る機会なんてないと思っていたか  
らな」

俺は制服に着替えて、今から行く学校にワクワクしていた。

このワクワクは、何歳になっても変わらない。

「準備もこんなもんだろう」

一通り準備を終えた俺は空のカバンを手に取り、外に出た。

「あら、準備は大丈夫ですか」

「はい、大丈夫ですよ先生」

「廻君、これをカバンに持って行きたまえ」

「ありがとよブライト博士。でも、変な実験道具は返却するよ」

「二お兄ちゃん、行ってらっしゃい!!!」

「ああ、行ってくる。いい子で待っているんだぞ」

一人一人に挨拶をし、俺は学校に向かった。

――学校に向かい中――

学校に向かう最中、様々な風景を見て楽しんでいた。

お店や公園等が新鮮に見えた。

まあ、俺は施設からあんまり出なかつたし、何よりDクラス職員の時は実験以外では外にさえ出られなかつたのだから。

全てが新鮮に感じた。シャバの空気だ!!というが確かにそんな感じだ。

そんな事を考えて歩いていると……

「うわああ、どいてどいて!!」

「え」

声の方を振り返ると、制服の女性が俺に向かって突っ込んできた。

その子は、茶髪で韓国か朝鮮系の女の子だった。

そして…

ドゴツ!

頭突きされた

拝啓、先生とブライト博士へ

入学式の朝に女の子に頭突きされるなんて聞いてないですよ。

え、ブライト博士、絶対笑っているだろう。

「ふええ!?大丈夫ですか!?!」

「なんで…!」

というか、元Dクラス職員なのに女の子の頭突きひとつで………  
そんな事を思いつつ、意識を落とすのであった。

その後、俺は気づけば夕方になっており完全に入学式を遅刻。

それどころか、自分の教室にも行けず保健室で担当の先生から自分のクラスと必要なプリントだけを渡された。

帰ったら、案の定ブライト博士と先生に笑われた。  
腹いせにブライト博士をボコった俺は悪くない。

先輩だろうが、関係ない！

——翌日——

「ふう、よし大丈夫だな。行ってきます」

「慎重になりすぎじゃない？ 廻君」

「貴様には、分かるまい。女の子に頭突きさせられ、気絶させられて自分の教室すら案内されなかつた絶望を……」

「言葉だけ聞くとパワーワードだよね、それ」

「とりあえず、行ってくる」

「行ってら、頭突きされないようにね！」

とりあえず、無視して学校に向かおう……

そう思い、一歩踏み出した。

次こそは、無事に学校にたどり着くために！！

チュンチュン

「はっ、敵か!？」

「いや、鳥だよ。廻君……」

……無事にたどり着くために！！

——登校中——

ここだ。この道からあの女の子がやってきたのだ。

そう思い、警戒しながら歩いていると……

「ああー!! 見つけた!! 昨日ぶつかった子だ!!」

そんな声を聞こえ振り替えるとあの女の子がいた。

そして、こっちに向かってダッシュしてきたのだ。

「昨日はごめんなさい!!」

そう言いながら、こちらに向かって走って来ていた。

マズイ!! このままでは昨日と同じパターンになってしまう!

俺は速攻で彼女から逃げ出した。

「ああ、何故逃げるの!？」

「逆になんで逃げないと思った!？」

「わ、私はただ謝りたいだけなんです!!」  
「なら、こつちに向かつて走るなよ!!」

マッテー!!  
コツチ、クルナ!!

ー学校ー

「ゼイゼイ……」

「ハアハア……」

結局、俺たちは学校まで走り続けた。

時間も予鈴まであと少しだが、間に合うぐらいだ。

まあ、学校には着いたが周りの目線が痛い。

これ、絶対【朝からなんで走っている?】とか思われている。

「ゼイゼイ……待ってて言ったじゃん……ゼイゼイ」

「ハアハア……アホが……油断したら頭突きされるだろうが……ハアハア」

「いや!?もうしないからね!!」

「いや!入学式当日に頭突きされた以上信用出来ないね!」

「うっ!し、仕方ないじゃん!入学式の準備もしないといけなかっただから!」

「だったら、早起きしろよ!」

「出来たら苦労しないよ!というか、私が先輩だからね!」

「知るか!むしろ、先輩に俺の入学式を潰されたのかよ!」

そんな話をしていると……

「おい、貴様ら」

「なに!（なんですか!）」

「予鈴のチャイムが鳴り終わってもここにいていいのか?」  
「え」

そう言った瞬間、授業開始のチャイムがなったのであった。

キンーコンーカンーコン

「ああー!!」

2日目、気絶しなかったものの遅刻。

「――教室――」

「遅れました!!」

ガラガラと勢いよく教室のドアを開ける。

しかし、もうすでに授業は始まっており、何人かの生徒と黒板の前にいる担任先生がこちらを向いていた。

「君……初日は仕方ないとしても、2日目もって」

「すみませんでした。」

「おかしいな……」

この世界に来てからずっと謝っているなと思うと

「まあ、いいから。あの空いてる席に座りなさい」

「あ、はい」

そう言い、後ろ側の空いてる席に向かった。

席に座り、担当先生が話を始める。

今日は学校内を案内する予定と今後の授業の教科書販売について等を話している。

「じゃあ、案内するから廊下に並べ。」

担当先生がそう言い、皆が廊下に並び始める。

俺も並ぼうとすると……

「よお、不良少年!」

隣の席の奴が喋りかけて来た。

「いや、好きで遅刻した訳じゃないからね」

「またまた、そう言って〜」

「いや、本当だって」

「そうなのかー。そうだった俺の名前は青木あおき 健太けんた」

「お、よろしく。俺は取音 廻」

「おおー、よろしく。廻!」

「というか、もしかして昨日のうちで自己紹介終わった感じ?」

「ああ、昨日で全員やったぜ」

良かった、隣がフレンドリーでここまだと卒業までぼっちルートを



覚悟したぜ。

しかし、自己紹介は終わっていたか。

せっかくに色々と考えていたのに許さないからな、あの先輩め！

そう思いつつ、廊下に並ぶ。

「そういえば、お前がぶつかった人ってどんな人なんだ？もしかして、女子か!!」

「女子だけど…」

「なに!?!うらやましいぞ貴様!!」

「…逆に聞くけど女子に頭突きされた経験をしたいか？」

「ええー、ぶつかるなら分かるけど頭突きってネタだな。」

「うるせい」

そんなことを話しながら廊下を進む。

「とうか、お前がぶつかった人ってどんな人なんだよ？」

「うーん、先輩で茶髪のショートカットだったよ。」

そう言うと、健太が顔をしかめた。

「マジか、お前よく生きていたな。」

「え」

「え、お前知らないのか？この町の人なら知っているはずだぜ」

「いや、俺最近こっちに來たばかりだからな」

「なるほどな、通りで。お前が言っている先輩は誰もが知っている化け物だよ」

とりあえず嫌がらせをやりしよう

私はただ助けたかった。

あの日、両親を守るために……

だけど、頭から離れない。

あの日、両親から言われた言葉を

化け物と言う言葉を……

――主人公side――

「化け物？」

「そうそう、あんまり関わるなよ」

「危険なのか？」

「本当に何も知らないのか……」

「おい、お前たち早く着いてこい」

担当先生にそう言われて俺たちは急ぎ足で皆の元に向かうのであった。

――お昼休憩――

今はお昼で先生に作ってもらった弁当を食べていた。

健太は、購買で買ってきたサンドイッチを食べている。

「それで健太。モグモグ……さっきの続き……モグモグ……なんだけど」

「いや、食うか喋るかのどっちかにしろよ」

「…モグモグ…ゴックン。」

「まあ、いいや。さっきの話の続きなんだけだよ」

俺は健太の話に耳を傾けた。

話の内容はこうだ…

昔、ある少女がいました。

少女は普通の女の子でした。

あの日までは…

あの日、少女の家に強盗が乗り込んできました。

少女の両親は少女を守ろうとして捕まってしまった。

少女は、両親を守ろうとしたのでしよう。

少女は勇敢にも強盗へ立ち向かったのです。

そして…少女は…

少女は、強盗を半殺しにしたのです。

その後の強盗は、病院で未だに目を覚ましていません。

「…と言う事で、あの先輩は化け物って言われている訳」

「……」

「おい？ 廻？ 聞いているか？」

「あ、ああ大丈夫。考え事をしていた」

間違えない。

しかし、おかしい。

元いた財団の報告書よりも明らかに進化している。

彼女は、命令のみしか効かなかったはずだ。

命令なしで、能力が発動したか…

ふむ……………

「健太」

「うん？」

「とりあえず、あの先輩に嫌がらせするわ」

「ぶふっ!!お、お前、俺の話聞いていたか!？」

「ああ、つまり人間とゴリラのハイブリッドって事だろう」

「違うよ!？」

そんな会話しながら、彼女の事を考えていた。

元いた世界で見たことある。

彼女は、SCP-2599だ。

彼女は【不十分】であり、命令に対して【不十分】の結果になってしまう。

しかし、命令次第ではえげつない結果も残す。

不死身の爬虫類を殺すという命令には半殺しにしたという結果になった。

逆に紙を片付けるの命令では全てを片付けられないという結果になったのだ。

報告書の最後には…

【命令なしに現実改変できる段階へと進化しないように監視を強化することを推奨します。】

と書かれていたはず……

そんな事を思いつつ、お昼は過ぎていく……

「おい、廻!!話を聞けよ!!」

——放課後——

俺は下駄箱で待っていた。

一応、名前も確認したが間違いない

名前は【ジーナ・チョウ】だった。

彼女が何故に日本いるかは分からないがどちらにせよ接触あるのみだろう。

まあ、今回からやる嫌がらせは本当に嫌だろうな（ゲス顔）

そんな事を考えていると

ガヤガヤガヤ

周りがうるさくなった。

多分、彼女が来たのだろう。

——ジーナside——

「はあ」

私がつめ息を出すと、周りの人が怯える。

【あの日】以来、私の周りにはこんな感じだ。

彼は、多分最近来たのだろう。

だから、朝はあんなに話してくれたのだろう。

だからこそ、私の噂は聞いたのだろう。

もう……友達……彼は

そう思いつつ、下駄箱に向かう。

下駄箱に着くと声が聞こえた……

「待っていたぜ、頭突き先輩！」

見上げる、見上げてしまう。

そして、彼がいた。

——主人公 side ——

「待っていたぜ、頭突き先輩！」

ドヤ顔で言う。

決まった……

この頭突き先輩は絶対に俺が噂を聞いたと確信しているだろう。

だからこそ、俺は嫌がらせをするのだ!!

その名も【俺つちと友達（生贄）にならない?】という作戦だ!

説明しよう!!【俺つちと友達（生贄）ならない?】とは!!

先輩には多分友達がない!

そこで俺が友達となり、周りに友達を増やしていき最終的にピンチになったら生贄!!ヒヤツハー!!という感じ裏切るのだ!!

我ながら恐ろしい作戦だぜ!!

そんなことを考えていると、先輩が泣いていた。

「な、なんで……」

「ふふふ、先輩！なぜ俺が待っているのか！なぜ逃げなかったのか！わかるか!!」

よし、この感じでマイ・ベント・フレンド友達に!!

そう思った瞬間

「ふええええん!!」

ガチ泣きされた。

予想と違うぞ……………

友達（裏切る予定）ができました！

「ヒグツ、エグツ……」

今は、学校から離れて近くの公園に先輩と一緒にいる。

あの後、周りの生徒が【コイツ、泣かせやがった】の目線になったので急いで先輩を公園まで連れてきたのだ。

フツ、明日から有名人だなこれ（遠い目）

「あの先輩、とりあえず泣き止んでくれませんか？」

「ヒグツ……だって……エグツ」

とりあえず、泣き止むまで隣にいる事にした。

公園では、子供がサッカーや砂遊び等をしており、元氣そうに笑っている。

「……ふう、落ち着いたわ」

「あ、やっとうですか」

「……デリカシーがないわね」

「そんな性格なので」

「……ねえ、あなたは私の噂を聞いたの？」

「聞きましたよ……」

「そう………怖くないの？」

「うーん、怖いとは思いましたよ」

「っ！そうよね……」

「人間とゴリラのハイブリッドって聞いて。」

「ええ、そう。私はゴリラと人間のハイブリッドって違うわよ!!え、何その噂?!聞いた事ないですけど!?!」

「ええ!?!違うですか!?!」

「違うわよ!!というか、なんで残念そうなのよ!？」

「……違うのか」

「何を期待しているの!？」

そんな会話して、中々本題に入れないのか、先輩がまた黙り始めた。

「……私はね、【化け物】なんだよ?なんで逃げないの?」

「……」

「私は、守ろうとしたただけだったの……なのに……」

「……」

「あの日、両親が人質として捕まって反撃したくて、心の中で【殺す】って思った瞬間、目の前が真っ暗になって、気がついたら……半殺しに……」

「……」

「化け物だよ。親とも未だに会話があんまりないの。……ねえ、何か言ってみよ!!」

「うわ、蝶だ」

「話を聞いてない!？」

「いや、聞いてましたけど……ほら、自分シリアって向いてないから」

「それ、自分で言う!？」

正直な話をする、この話の類は全く興味がない。

元Dクラス職員からすれば、毎日が死と隣り合わせなのだから。

こんな話を聞いてもただの不幸自慢にしか聞こえない。

まあ、そんな事を先輩に言ってしまったら、ガチ泣きされるだろう。

……面倒いな、フォローしとくか。

「先輩は優しいですね」

「え」

「本当の化け物なら無害そうに見える危ない奴らなんですよ」

そう、キチクマとかキチクマとか!!

アイツなんだよ!一回あった事があるがアイツ、絶対に【俺の左腕】



を狙っていやがった!

速攻でアイツから逃げ出したけどな!!

「だから、先輩は優しいですよ。それに両親を守ろうとしたのでしよう。なら、絶対に優しい人ですよ」

「ヒグツ…エグツ…」

「だから先輩、俺と【友達】になりましょう」

「うん!」

先輩は泣きながら、俺は笑いながら握手をする。

……まあ、裏切る予定だけどね!!

けっけ、悪魔的な計画だぜ!

自分が恐ろしく感じてしまう!

こうして、友達（裏切る予定1号）が出来たのであった。

「ちなみに、なんで頭突きで気絶したですかね?」

「ああ、多分ぶつかる瞬間に岩だったら痛くないのになって思ったから」

「…なるほど」

つまり、あの時は岩頭の不十分で石頭になったのか。

「先輩」

「何?」

「やっぱ、ギルティで」

「なんで!?!」

ー報告書ー

SCP-2599 【不十分】

オブジェクトクラス：Euclid

【説明】

SCP-2599は以前ジーナ・チョウとして知られていた14歳の朝鮮系の女性です。SCP-2599の異常特性は2つの構成要素を持っています。

SCP-2599の主要異常効果はどんな直接的な命令に対しても背くことができない精神的衝動です。この効果は受けた命令に対するSCP-2599の認識次第です；命令されたと思わなければ、従いません。

現在この効果の限度は判明しておらず、SCP-2599は自傷、他者への暴力、その他好ましくない行動等にも従います。SCP-2599の心理抵抗度数は0で、現在記録されている中で最低値です。SCP-2599の第二効果は与えられた命令を完全には遂行することができないことです。この効果は直接出された命令であれば殆どの状況でもSCP-2599に発生し、出された命令の要素を完全にまたは十分に遂行することができません。

【追記】

なお、平行世界のSCP-2599は独自に発達しており、己の意識で現実歪曲ができるようになっております。

しかし、その目標も完全にまたは十分に遂行することができません。

猫か…よし逃げるか

ーとある公園ー

「ええー、嫌だ〜」

「そう言うなよく、○○ちゃん〜」

とあるカップルがイチャイチャしていた。

公園は、夜の為か昼よりも恐ろしい雰囲気かもを醸し出している。  
ガサガサガサガサ

「キャッ!」

「ウオ!」

いきなり、草むらが動いた。

カップルは驚き、そこに何かいると感じた。

男は、彼女を守るために声を荒らげる。

「お、おい!だ、誰だよ!」

すると、草むらから【猫】が出てきた。

男は落ち着いた。

ただの猫かと安心していると彼女は怯えていた……

「あ、ああああ」

「ど、どうした?」

「あ、あの猫、【変だよ】……」

「え」

男は再び猫に目を向ける。

そして、気づいてしまう。

猫の【異変】に

「ああ、あああ」

「ひ、ひえっ!」

気づいたら、恐れてしまう……

そして、猫はカッパルの方を向きながら

「ニャー」

鳴き声をあげる。

「ヒイヒイ!!」

「ま、待ってよ!」

男は彼女を置いて逃げる自分が助かるために……

夜の公園に2つの悲鳴と一匹の鳴き声が響き渡る。

ニャー

――主人公 side ー

「うーん、平和だ〜」

今は教室で小休憩中だ。

あれから数日後たったのだが、先輩は色々と変わったらしい。  
今は挨拶をしたり、クラスメイトと喋るようになったらしい。

まあ、俺は若干周りから避けられているが、そこまですである。

「なあ、廻。次の授業ってなんだっけ?」

「えっと、数学だったな」

「げえ!? 宿題やってないや! 廻、見せてくれよ!」

「相変わらずだな、健太。ほらよ」

「おお! 恩に着るぜ!」

そう言い、教科書を渡す。

数学が終わったら、昼休憩だ。

昼休憩は、今は先輩の所に行って先輩と一緒に食べている。

「ほいよ、教科書ありがとうな」

「ああ」

「そう言い、教科書を受け取る。」

「そういえば、あの噂。聞いたか？」

「また、変な噂か？」

「ああ、なんでも〇〇公園で【変な猫】が現れたらしいぜ」

「【変な猫】？」

「ああ、具体的には分からないけどよ。見たら、不幸になるとか1週間  
の内で亡くなるとかあるみたいだぜ」

「へえー」

「相変わらず、興味なさげだな」

「そうかな？」

「そうだよ」

猫ね……

嫌な思い出しかないな。

【あの】猫なら、絶対に会いたくないからなー

絶対にミーム汚染されるもん。

しかし、【あの猫】って井戸小屋にいる気がしたが……

独自に発達したか？

「面倒いな……」

「うん？ そうだよな、数学ってなんでやるだよな」

「ああ、そうだよな」

「そう言い、俺たちは授業の準備をするのであった。」

「ーお昼休憩ー」

「じゃあ、先輩の所に行くてくるわ」

「くっ！羨ましいぜ！」

「じゃあ、お前も来るか？」

「ううっ、あの先輩なんか変わった感じがするからな。今は可愛く感じるよな」

「へえ？そうかな？」

「そうだよ!!いいな美人と一緒に食えるなんて」

健太は文句を言っていたが、コイツら最近まで【化け物】扱いしていたのにな…

まあ、先輩が明るくなってからは、そんな噂は無くなりつつあるらしいが。

「という訳で、行ってくるわ」

「おう、行ったら」

――移動中――

先輩とは、今は中庭で一緒に弁当を食べていた。

俺が上級生のクラスに行くのは不自然なので中庭で待ち合わせをしているのだ。

「そういえば、廻君。噂は聞いた？」

「モグモグ…猫の話ですか？」

「そうそう。クラスの子も見たらしいだけど」

「モグモグ」

「なんでも【変な猫】だったらしいの」

「モグモグ」

今のところ、ミーム汚染はないな……

【あの猫】は、何がトリガーなのか分からないのがキツイ事だ。

今の会話でミーム汚染してもおかしくないのだから……

「それでね、今日クラスの皆でその噂の猫を捕まえようってなったの

！」

……あかん。

――放課後――

今は先輩とそのクラスメイトと共に○○公園にいる。

一応、念の為に健太も連れてこようとしたが怖いので速攻で帰りやがった。

まあ、強制ではないからいいのだが。

今は、先輩とクラスメイト（女子2男子2）。

そして、俺がいる。

「よし、今日は先輩がいる事だし、俺たちがリードしてやるぜ！」

「全く、○○君はすぐにリーダー気取りをするだから！」

「いいじゃん、それがいいところでもあるだから」

そう感じで先輩達が話していた。

正直な話、帰りたいのだが【あの猫】がいたらヤバいので着いてきたのだ。

「なあ、どうせなら二手に別れないか？」

「ええー、それだとヤバくない？」

「大丈夫でしょう！後輩君もそれでいい？」

「別にいいですよ」

そう言い、2つのグループに別れた。

【先輩・俺・女生徒】

【男子生徒2・女生徒】

「よし、じゃあ別れようか!!」

そう言い、別々の行動をするのであった。

——行動中——

「そういえば、後輩君ってなんて言う名前なの？」

「ああ、自分は取音 廻って言います」

「そうなんだ！あ、私は あらかき 新垣 まい 舞って言うの！」

「よろしくです舞先輩」

「うんうん、君のことはジーナから色々と聞いているよ！」

「ああ、頭突きヘッド先輩からですか」

「私、そんな名前じゃないよ!？」

「あはは、面白いね君！」

こうして、猫探しは始まったのであった。

【ニヤー】



## ニヤーンニヤーン（遠い目）

あれから猫を探して数分。  
現れる気配が一向になかった。

「いないよー!」

「舞ちゃん、気持ちはわかるけどね」

「先輩方、少し休みませんか?」

「いいよ」

とりあえず、今は休んでおこう。

こういう作業は体力勝負だ。

「先輩方、自動販売機で飲み物を買って来ますよ」

「え、いいの!?! 私はフルーツミックスがいいな!」

「うーん、私はなんでもいいよ」

「了解です。舞先輩はフルーツミックスで先輩は俺が選んできますね」

「うん、よろしくね」

そう言い、俺は自動販売機に向かうのであった。

ー ジーナ side ー

「ねえねえ! ジーナちゃん!」

「どうしたの?」

今、私はクラスメイトの皆と後輩の廻君と猫探しをしている。  
昔の私なら考えられなかった行動だ。  
でも、私は変わった。

あの日から、彼に会った日から……

「後輩君って変わっている子だよね!」

「うん、そうだね」

彼は変わっている。

結構、変わっていると思う。

しかし、私は彼の事をあまり知らない。

「うーん」

「どうしたの？」

「私ね、彼の事をあんまり知らないなって思ったの。彼は私と友達なのに…」

「ほうほう！つまり、ジーナちゃんは彼が気になるだね！」

「うん、そんな感じかな…？」

そんなことを話していると…

イヤアアアアア

ウアアアアアア

ヒイイイイイイ

悲鳴が聞こえた。

この悲鳴は、さっきの別グループ3人の悲鳴である事に気づく。

「舞ちゃん！」

「うん！」

私たちは、悲鳴の元に向かった。

ー主人公sideー

俺は先輩方の飲み物を買いに自動販売機を探していた。

「お、あったあった。自動販売機」

「確か：舞先輩はフルーツミックスと。」

お金を入れ、フルーツミックスのボタンを押す。

「俺は、コーラでいいか」

コーラのボタンを押す。

「ふむ、先輩のはどうしようかな？」

悩んでいると、こんな飲み物を発見した。

【まるでチーズ！チーズ好きに必見！チーズジュース!!】

「……これでいっか」

そう言い、チーズジュースを押し。

三本の飲み物を持ち、先輩方の所に向かおうとすると……

イヤアアアアア

ウアアアアアア

ヒイイイイイイ

「げっ、このタイミングかよ……」

そう言い、飲み物を持ちながら走り出す。

ージーナsideー

「悲鳴ってあっちから？」

「そうみたい!!」

私たちは悲鳴が聞こえた場所に向かっていった。

すると、前方から2人の男子が飛び出してきた。

「ハアハア……」

「ふう……」

「2人とも大丈夫!？」

舞が2人の心配をする。

しかし、もう一人の姿が見えない。

「ねえ、○○ちゃんは？」

「あ、ああ……置いて来ちゃった。」

「そ、そんな!？」

「なんで!」

「仕方ないだろう!!あんな猫がいるなんて聞いてないぞ!!」

「いいから逃げようぜ!!」

そう言い、2人の男子は走り逃げ出した。

「……舞ちゃんも逃げて」

「え、ジーナちゃんはどうするの？」

「私は、○○ちゃんを助けに行くよ。後輩君もいるしね」

そう言い、私は歩き始めた。

すると、舞ちゃんも一緒に着いてきた。

「じゃあ、私も行くよ」

「舞ちゃん……」

「それに後輩君もいるからね！」

「うん、わかった！」

一緒に走り続けた。

そして、○○ちゃんが倒れている場所に着いた。

「○○ちゃん！」

私が駆けつける。

○○ちゃんは、ちゃんと息をしており気絶していた。

ガサガサガサガサ

草むらから音が聞こえる。

さつき言っていた猫がいるかもしれない。

そう思い身構えた。

――主人公side――

「お、いたいた」

「ま、廻君！」

「びっくりさせないでよ!!」

「あ、すみません」

そう言い、先輩方に近づく。

「そこの方は大丈夫ですか？」

「うん、○○ちゃんは大丈夫。気絶しているだけだから」  
「そうですか。他の男先輩方は？」

「アイツら、女の子を置いて逃げたわよ！許さないわ！」  
「舞先輩、落ち着いて」

ガサガサガサガサ

「ニャー」

そんな鳴き声と共に草むらから猫が飛び出してきた。

「…」

「ひい、あの猫！」

舞先輩が驚く。

「噂は本当だったのね。」

先輩が身構える。

「ニャー」

猫は鳴く。

そして……俺は猫に近づく。

「ちよ、廻君!？」

「危ないよ!？」

先輩方が何か言っているが、歩みを止めない。  
そして、猫の前で止まった。

「……なるほど。【猫】は猫でも猫違いか。」

下半身がない猫に向かって言った。

「ニャー」

「先輩方、大丈夫ですよ。」

「本当に？」

「ええ」

俺は猫を撫でながら言う。

この猫もSCPだ。

SCP-529だったはずだ。

「この猫は下半身がないけど普通の猫と基本は一緒です」

すると、舞先輩が恐る恐る撫でる。

撫で方が気持ち良かったのか、舞先輩にスリスリする。

「くっ、可愛いすぎる！」

「結局、どうするの？この子？」

「自分が預かりましょうか？」

「本当？助かるよ！」

孤児院で預ければ、ブライト博士がいるが大丈夫だろう。

しかし、先生や子供たちには、なんて言おうかな。

そう思いつつ、猫を預かる。

「あ、先輩方。今更ですが、飲み物です。」

そう言い、飲み物を渡す。

この猫は、チーズが好きと聞いたことがあるので、チーズジュースは俺が貰う事にした。

「ありがとう！」

「ありがとうね！」

「いえいえ、ではまた明日。」

気絶している先輩は、舞先輩が家を知っていると事だったので舞先輩がおんぶしながら帰った。

「あ、走ったからコーラ爆発するかも」

案の定、次の日に先輩にボコボコにされました。  
ちなみに、逃げた先輩方は女子を置いて逃げる男として噂が学校に  
広まっていた。

ー報告書ー

SCP-529 【半身猫のジョージ】

オブジェクトクラス：safe

【説明】

胸部から尻尾までの部位が失われているように見えます。あたかも真つ二つに切断されたような外見をしています。

そのような状況にもかかわらず健康問題は無く、まるで四肢が全て揃っているかのように動きまわります。例えば、歩行や食事後の排泄物なども身体が欠けていないかのように動きます。

断面図から身体の中を覗くことはできず、代わりに可視光線をすべて吸い込む黒い綺麗な穴が見えます。触れるとゆるやかに曲がっています。この箇所を優しく撫でるとポジティブな反応（喉を鳴らすなど）を示しますが、長く続けるとエージェントに対し爪を出して襲い掛かります。引っかかれても特に異常はありません。

わお！イナミさん！

ここは、とある美術館。

警備員の男は、今日も美術館内を巡回していた。いつも通りの仕事になるはずだった。

ゴリゴリ……

その音は、とある展示室から聞こえた。

警備員は誰か侵入したのかと思った。

侵入されたなら、面倒臭い事になると思い、音の方へ向かう。

音は【彫刻展示室】から聞こえた。

ゴリゴリ……

音はまだ聞こえる。

暗闇の展示室を懐中電灯で照らす。

中は、奇妙なオブジェクトが並んでいた。

誰もいないようだ。

確認した警備員は、中に入る。

音も消えており、誰かが隠れていると思った。

詳しく探していると

ゴリゴリ……

まただ！と思い、振り返る。

そこには、何もなかったただ彫刻があるだけ。

おかしいと思った。

ひとつの彫刻が動いている。

恐る恐るとその彫刻に近づくと

気のせいか……

触っても生きてる感じをしない。

安心して瞬きをする。

そして、消えた。



ゴリゴリ……

後ろから音が聞こえる。

あの音は、何かを引きずる音なのだ。

そして、音は消える。

目の前が暗くなるのを感じた。

ー主人公 s i d e ー

あれから、猫は無事に孤児院で飼う事になった。

名前も決まった。

下半身から名前は「半サブロー<sup>はん</sup>」となった。

ブライト博士が研究をしようとしていたが、子供達が必死に止めていた。

その後、ブライト博士は正座されながら先生に説教されていた。

まあ、ともあれサブローも孤児院に馴染んでいる。

こうして、今日も俺の日常は過ぎていく。

「うーん、休日って暇だな」

「ニヤー」

今日は休日である。

学校も休みで子供たちも公園に行き、遊びに行った。

俺は孤児院に残り本を読んでいる。

「ふふふふ、暇って言ったな！廻君！」

「OK、今予定ができたわ」

「なんでだい!!暇って言っただらう!!」

「サブロー、散歩に行くぞ」

「ニヤー」

「ちよっ、サブロー!!猫だらう!散歩いらないだらう!」

ちっ、しつこいなブライト博士め……

面倒くさいな……

「いいから聞いてくよ」

「……なんだよ」

「うわ、明らかに嫌そうな顔。実はね、ここに美術館のチケットがあるのだ」

「おう。」

「一緒に行こうじゃないか!!」

「却下」

「なぜ!？」

「なにが悲しくて野郎と一緒に美術館なんだよ」

「ええー、いいじゃん!!行こうよ」

「ええ、ウザいわ!!わかったわかった!行くから!抱きつくな!!」

こうして、ブライト博士と美術館に行くのだった。

――美術館――

「ここがね……意外と大きな」

「おーい、廻君!受付はここだよ!」

「今、向かうよ!」

ブライト博士のところに向かうと受付は終わっていた。

手にはパンフレットも持っており、「世界の彫刻展示」と書いてあった。

なんでも世界の彫刻を展示しているらしい。

「で、なんで俺を連れてきた」

「ほう、なんでそう思ったのかい?」

「普通だったら、子供たちも誘って一緒に来ただろう」

「うんうん」

「そして、俺を普通に連れてこないだろう。むしろ一人で行くだろう」

「ほうほう」

「後は勘だな」

「まあ、正解かな。実はね!とある話を聞いてね!」

「おう」

「ある彫刻がね、動くという話を聞いてね！」

「帰る」

「なんで!?!」

絶対にあの彫刻じゃん。

なんであるの。あり得ない。

しかし、新聞やニュースを見ているが、この美術館での死人情報はない。

となると、別のSCPの可能性がある。

「お、あそこだよ！ほら行くよ！」

「わかった帰らないから、引っ張るな！」

――展示室――

「ここに噂の彫刻が!!」

「ブライト博士、ちよつと俺と離れようか」

「なんで!?!」

「静かにしなさいって書いてあるでしょう！ちよつ、警備員さん！俺、関係ないです！」

警備員さんに注意され、ようやく静かに鑑賞できる。

とりあえず、目的の彫刻を探すとしよう。

流石に休日だ。

美術館とはいえ、人は多いな。

そんなことを考えていると……

「うわああ!!」

悲鳴が響き渡る。

悲鳴元を見ると、一人の男が倒れていた。

そして、男の目線の先には【二足歩行で手を前に出している彫刻】がいた。

ただし、彫刻の顔には【猫の絵】が描かれていた。

なんか、違う……

「大丈夫ですか!？」

警備員が倒れている人に話をかける。

倒れている男は見た感じは怪我は見えない。

驚いて倒れたのだろう。

「ちよ、彫刻が動いた!!」

「落ち着いてください」

男は警備員に連れられて外にでた。

「ふむふむ、これが噂の彫刻か!!」

「ブライト博士、目を輝かせないで」

「だって未知だよ!未知!!」

このままでは、俺達も外に出されそうだ。

そう思いながら、目の前の彫刻を見るのであった。

ちよつ、削ったらダメでしょう!!

「ふむふむ、実に興味深い!」

「ブライト博士、気持ちは分かるけど落ち着いて」

今、俺達は動いた彫刻を観察していた。

実際に見ていないので分からないが、男の驚き方して本当に動いたのだろうか。

というか、元の世界ではコイツの収容施設の清掃をやった事がある。

比べて見ても、彫刻自体は一緒だが顔に描かれている絵が違う。

元いたヤツは、顔の絵は汚れている感じをしていたはずだ。

そう考えていると……

「うひょー!」

「お客様!?!おやめ下さい!」

「この彫刻はどうなっているのだ!是非サンプルを!!」

「ちよつ!?!削ろうとしないでください!!」

警備員がブライト博士を止めようとしていた。

というか、何処から彫刻刀を持ってきた。

「ちよつと、そこの君!彼の関係者でしょう!!」

「廻君!!是非とも一緒に削ろうじゃないか!!」

「やめろ」

とりあえず、ブライト博士を止める事にした。

というか、展示物を削ろうとするなよ。

そう思い、ブライト博士を彫刻から引き剥がすのであった。

「何故、止めるのだ!?!」

「当たり前だわ」

「くっ!!」

「くっ!!じゃないから。ハイハイ、別の彫刻を見に行くよ」

「ええー、嫌だ!!」

「駄々をこねるな」

そう言い、別の場所に移動しようとした瞬間だった。

そう、油断していた。目線を外してしまった。

ゴリゴリ……

その音と共に……

そして、ブライト博士が……

彫刻に……

「ぎゃあああああ!!」

【ロメロスペシャル】をかけられていた。

何故、ロメロスペシャルなんだよ？

というか、何故プロレス技なんだよ？

怒っているのか？キレているのか？

削られそうだったからか？

マジで意味が分からなかった。

「ちよつと、また君たちかい？つてなんでロメロスペシャル!?彫刻で何をやっているんですか!？」

「その変態が勝手にやりました」

「いやいや!!いいから離してくれよ!!廻君!!」

ーブライト博士を剥がし中ー

い、意外と固かった……

警備員さんも息が上がっている。

ブライト博士は、床にうつ伏せに倒れていた。

「ゼイゼイ……なんで……」

「ごつちのセリフだよ。警備員をやっている初めてだよ……」

「腰が…腕が…足が…」

ブライト博士はもう立ち上がれないだろう。

そう思いつつ、もう一度彫刻を見る。

……やっぱ違う。

殺意？憎悪？というのかよく分からないが、そんな嫌な感じはしな  
いと思つていると

「全く、この彫刻はイタズラ好きなんだから」

「え、警備員さん。この彫刻が……」

「うん？ああ、なんとなくだけどね。意思があると思うだよ」

「……」

「昨日だって、巡回していたら後ろにいて目を隠してきたのさ。驚い  
ただけどね」

凄いなこの人。

普通、驚いただけで終わらないだろう。

気持ち悪いとか壊したいとかの憎悪があるはずなのに…

「変かい？彫刻に意思があるなんて言うなんて」

「ええ、変ですな」

「そんなストレートに言うかい？」

「あ、変なのは警備員さんの方です」

「え、私かい!？」

「ええ、普通なら彫刻が動いた時点で逃げるでしょう。なんで逃げな  
いですか?」

「うーん」

そう言うと、警備員は悩み始めた。

普通ならそういうギミックだとか怪奇現象だで逃げてもおかしく  
ない。

でも、この人は逃げなかった。

純粹に疑問に感じた。

「……多分だけど、同情かな」

「同情ですか?」

「うん。コイツが動いてイタズラする理由って寂しいとか構って欲しいとかの子供らしい理由だと思う」

「はい」

「私も子供の時に親に仕事に行って欲しくないからおもちやを片付けなかったり、本を積み上げて遊んだりした。家に独りって寂しいし辛いからね」

「……」

「独りほど辛いのはないからね。そんな理由で逃げなかったかもしれないや」

「そうですか……」

「あ、子供にする話じゃなかったよ。ごめんね」

「いえ、色々と参考になりました」

そう言い、ブライト博士を担いで出口に向かう。

そして、出口のゲート前で止まり……

「警備員さん……」

「うん？なんだい？」

「また、来ますね。イタズラ好きの彫刻と遊びに」

「うん！またおいで」

そう言い、出口のゲートを潜る。

全てのSCPが元から危険になった訳じゃない。

多分、元いた世界の「アイツ」だって純粹に遊んでいたはずだ。

だけど、理由は分からないが顔を汚されて危険になったのだろう。

もちろん、全てのSCPが危険じゃないと言う訳じゃない。

中には邪悪な奴だっている。

それでも……

後ろを振り返る。

出口には、警備員がこちらを見ており、その隣には彫刻が並んでいた。

……考えすぎだな。

そう思いながら帰るのであった。



「ほら、ブライト博士。自分で歩けよ。重いから  
「いや…私…まだ腰が…」」

てめえは俺をおふっ!?

ブンブン……

「「イエーイー!」」

その日、男たちはテンションが上がっていた。

明日が休みなのだろうか、もしくはいい事があり喜んでいたのでろうか。

そんな事は分からなかった。

テンションがMAXだった彼らは車を運転しながら、窓を全開にして音楽を大音量で流していた。

言わいる近所迷惑っていうヤツである。

とある道路を過ぎた時に標識が 変わる事に気づかずに……

キキッー、ドンツ!!

車は動かなくなった。

いや、動けないのだ。

その車は、岩に潰されていた。

周りは山ではなかった。崖でもなかった。

何も無い所で岩にぶつかったのだ。

中にいる3人は、見たら分かるように即死だった。

そして、標識は落石注意を表していた。

――主人公side――

「ふあああ、おはようございます……」

「おはようございます、廻」

「「おはよう! 廻お兄ちゃん!」」

「ニヤー」

「皆、おはよう……あれ? ブライト博士は?」

「ああ、彼なら研究に没頭して部屋から出て来てません」

「またか……」

いつもの事だが、遅くまで研究するなよ……

「そう思い、朝食を食べていると

『ニュースです。昨夜、〇〇県〇〇市にて車の事故が起きました。車は落石によって潰れており、車の中から3人の遺体が発見されており、身元を捜索中の事。また、警察も今回の事故は原因不明と言うことです。』

「またね」

「またですか？」

「ええ、昔からあそこは事故が多発するの」

「ふむふむ」

「前はスリップで、前々回は落雷で亡くなっている人がいるの」

「なるほどです」

「廻も近づかないようにね」

「了解です」

「そう言い、朝食を食べる。

しばらくすると、ドアが開きブライト博士がボサボサのまま登場する。

「どうやら、熱心に研究をしていたようだ。

「ううん、おはよう……」

「おはようございます。ブライト先生」

「「おはよう!!」「」」

「おう、おはようブライト博士」

ブライト博士も席に座り朝食を食べ始める。

しばらくして、俺はご飯を食べ終わったので学校に行く準備する。

今日もいつも通りの学校である。

そう思いながら、孤児院を出るのであった。

「学校」

今日もいつも通りだった。

授業も終わり、HRが始まる。

「ええー、じゃあプリントを配るぞ」

担任がプリントを配る。

遠足についてのプリントだ。

学生らしいイベントである。

「おい、廻。どうするの？おやつ！」

「落ち着けよ、とりあえず駄菓子一択だろう」

「ええー、もっとメジャーなものにしようぜ」

そんな事を話しながら学校は終わる。

――孤児院――

「よし、準備はこれでいいだろう」

俺は遠足の準備をしていた。

え、準備をするのが早いって？

楽しみは早めに準備するべきなんだよ。

例え、1週間後だろうがね!!

「ふふん〜♪」

「ふむふむ……」

――1週間後――

今日は遠足である。

現在は、学校におりバスに乗るのを待っていた。

フツ、ワクワクしてあんまり寝れなかったぜ。

ふとバックを見ると、見覚えのない道具が入っていた。

……ブライト博士、潰す。

そう思い、バックを背負う。

バスは3台並んでおり、俺達のバスは3台目のバスである。

「おーい、廻。そろそろバスに乗るぞ」

「うん？ああ、今行く」

そう言い、バスに乗る。

これが地獄とは知らずに……

――数分後――

バスは難なくと目的地まで走っていた。  
バスの中では、周りの生徒が雑談をしている。  
俺は外を眺めながら、話を聞いていた。

すると、一人の生徒が言った。

「そういえば、ここら辺だっけ？」

「うん？何が？」

「ほら、事故が起きた場所って」

「へえ、そうなの？」

「うん、両親が言ってた」

そうなのか。

ここら辺なのか……

窓を見ていると、標識が見えた。

標識の下には、花束や飲み物等が置かれていた。

亡くなった人への物だろう。

すると、変な雰囲気を感じた。

「標識が変わった？」

さっきまでは「生まれ」の標識だったはずなのに、今は「スリッパ  
注意」の標識になっていた。

キキッ――！

「うおっ！」

すると、重力に引っ張れる感覚がした。

そして……

バスは……

ドンツ!!!

横転した。

「痛ててて……」

目を覚ますと、外にいた。

どうやら、外に投げたされたのだろう。

「痛いよー!!」

「うえーん!!」

「ヒグツ……エグツ……」

「落ち着いてください!」

周りはパニックになっていた。

バスは3台とも横転しており、至る所から煙が漂っていた。

ふと標識を見てみると「止まれ」になっていた。

……なるほど、さっきは「スリップ注意」の標識だったからバス

が多分スリップしたのだろう。

それで横転した。

俺は立ち上がり、標識に近づく。

「お前か」

標識に言う。

コイツが……

「お前が俺の【駄菓子(300円分)】を潰したのか!!」

そう言い、標識に突っ込む。

すると、標識が変わり「飛び出し注意」の鹿のマークが出てきた。

そして……

「おふっ!?!」

鹿に衝突した。

カチカチカチカチカチ……

「おふっ！」

鹿に衝突し、道路に転がる。

「痛っ……」

鹿に当たったが意外とモフっとしたわ。

……落ち着け。

コイツが他に何を出すかを見極めないといけない。

そう思いながら、立ち上がる。

すると、また標識は変わる。

〔落石注意〕に変わる。

「!?ヤバい!!」

さっきの「飛び出し注意」で鹿が飛び出した。

つまり、この「落石注意」は!!

すると、上に影が生まれる。

上を見ると、岩が落ちて来ていた。

そして……

ドコン!!!

岩は落とされた。

カチカチカチ……

カチカチ……

カチ……

……

ドゴン!!!

「あぶえね!あの野郎が!!」

砂煙が舞う……

岩を退ける……

【左腕】を見せる。

カチカチカチ……

「全く見せる気は無かったけどな……」

カチカチカチ……

「舐めるなよ。標識如きが……」

カチカチカチ……

その左腕は、複数の細かいゼンマイで出来ており、異様な腕をして  
いた。

まわるまわるまわる  
回る回る廻る。

腕のゼンマイ動き続ける。

止まるのを知らないように……

「行くぞ、標識野郎……」

俺は足元にある石を取り、左腕で投げる。

石は常人が出せるような速度を越え、標識に当たる。

標識の一部が削り取られるが、直ぐに戻る。

「なるほど。半端の攻撃は直るか……」

だったら!

そう思い、標識に走り出す。

標識は変わり「落雷注意」に変わる。

空が暗くなる。

「なら、こうするまで!!」

俺は左腕にあるレバーを動かす。

【Normal】から【Return】に変更する  
その状態で、目の前にある岩を触る。



すると、岩が動き宙に浮く。

そして、最初に出てきた場所に戻る。

そのまま、雷に当たりくだける。

そのまま、突っ込む。

標識は焦った用に更に変わる。

〔落石注意〕・〔スリップ注意〕・〔落雷注意〕と連続に変更する。

空からは無数の岩と雷が生まれ、地面は摩擦が無くなる。

「舐めるな!!」

とりあえず、左腕で地面を殴り、摩擦を元に戻す。

そのまま、地面に既に落ちている岩を触り戻す。

戻る岩は、落ちてくる岩と雷にぶつかり合い砕ける。

落ちてくる岩を掻い潜りながら、標識の元に到着する。

「これで!!」

〔左腕〕で標識を触る。

すると、標識は嫌がるように激しく動く。

だが、もう遅い。

戻す、戻す、戻す!!

限界まで戻す!

標識は徐々に細くなり、そして…………

カーテン……

標識は戻った。

標識があつた場所には、人骨があり、多分10〜13歳あたりだ。

何故かは分からないが、この骨の上に標識を建ててしまいSCPになつたのだろう。

そう思いながら、左腕のレバーを〔Normal〕に戻す。

周りを見るが、どうやら怪我人の応急処置やバスに残っている子供の救出等でこちらを見ていなかったらしい。

すると、〔左腕〕に熱が帯びる。

見てみると、レバーが新たに追加されており、〔Mix〕と書かれていた。

〔左腕〕も普通の腕のように戻る。

「ふう……」

遠くから救急車の音が聞こえる。

ひとまず、これで大丈夫だろう。

そう思いながら、そのまま座るのであった。

「……なにあれ」

まさか、見られていると思わずに……

――バス横転事故――

高校生を乗せたバス3台が横転し、軽傷者43名・重傷者16名。

また、死者は出ておらず何故横転したかは不明である。

――報告書――

SCP-914-1【ゼンマイ仕掛けの左腕】

オブジェクトクラス：???

【説明】

当SCPは、SCP-914でDクラス職を実験した際にDクラス職員の左腕がゼンマイ仕掛けになっていた。

また、その時SCP-914のレバーは『消却済み』である。

SCP-914-1には、レバーが付いており【Normal】と

【Return】の2種類である。

【Normal】は異常性はなく

【Return】は物を戻す異常性が発見された。

ただし、生き物は戻せないようだ。

また、詳しくは調査していないため更なる異常性に関しては不明である。

見られた……だと

ー数日後ー

あれから【MIX】<sup>ミックス</sup>について色々試した。

【MIX】は、その名の通り【混ぜる】異常性だ。

例えば、【火】と【水】を混ぜることにより【缶コーヒー】が出てきた。

どうやら、混ぜるのは自由だが何が出てくるかはランダムだ。

とりあえず、【火】と【水】でコーヒーらしい。

わけがわからない……

ちなみに、缶コーヒーはブライト博士に飲ませたみたが普通だったらしい。

そういえば、あの事件は原因不明となり、俺たちは学校を1週間休学となった。

そんなこんなで、現状は【MIX】を調べる事以外は暇である。

「うーん、暇だ」

椅子に座りながら背伸びする。

サブローも適当に散歩中だろう。

「「廻お兄ちゃん！」」

「うお!？」

いきなり子供達が部屋に飛び込んで来た。

「どうしたんだ？」

「ごめんね！廻お兄ちゃん！」

「実は、お願いがあつてね！」

「おつかいを頼みたいの！」

「おつかい？」

「「うん!!」」

話を聞くと、子供達は先生からおつかいを頼まれたらしい。

しかし、子供達はこの後やる予定のテレビが見たいとの事。

まあ、暇だったのでおつかいに行くことにした。

「じゃあ、行ってきますす〜」

――1時間後――

「ふう、こんなもんだろう」

俺は一通り買い物終了し、近くの公園で休んでいた。

ベンチに荷物を置き、座っていた。

現在は5月であり、初夏である。

少し休憩してから帰ろうと思っていると

「ふははは、見つけたわよ!!」

声が聞こえた場所を見ると、すべり台の上に少女?が仁王立ちしていた。

誰だ、あれ……

「さて、帰るか……」

「ちよつと!!待ちなさいよ!!」

「ええー、俺、君の事知らないよ」

「ふふん!!そうでしょうね!」

なんだ?この小娘……

無視して帰ろうと思った瞬間だった。

「あんたの左腕の事も知っているから!!」

「……………はあ?」

マジか、見られたのか!?

左腕を見せたのは、孤児院の中だが人がいなかったはずだ。

だとすると、標識を倒すのを見てたのか……

つまり、同じ学校の人か……

マジか、面倒な……

「さあ!!あの【左腕】を見せなさい!」

「……………知らない」

「え」

「ワタシ、シラナイ」

「え、いや」

ダツ!!

「ちよつと!!」

俺は逃げた。

全力で逃げた。

こんな時は逃げるのが鉄則なのだ。

後ろから声が聞こえるが知らん。

そう思いながら、買い物袋を持って走るのであった。

――1週間後――

今日から学校。

【M I X】について色々試してみたが以外使えるのだ。

【火】＋【水】 Ⅱ缶コーヒー

【木】＋【火】 Ⅱ火薬

【水】＋【木】 Ⅱ鉄パイプ

現在の【M I X】から出る物である。

相変わらず、意味わからん。

そう思いながら、学校に向かう。

「あ、後輩君。おはよう!」

「おはようです。頭突き先輩」

「まだ言うの!?!」

先輩をイジリながら学校へ向かう。

そういえば、あの小娘はどのクラスなのだろうか?

口止めはするべきだったな。

「うん?どうしたの?後輩君」

「いや、なんでもないですよ」

「悩み事があるなら言っただね!」

「了解、オカン」

「オカンじゃないよ!?!」

「ハイハイ、学校に着くから」

「もう!!」

学校に着き、自分のクラスに向かっていると

「見つけたわよ！」

「げっ」

「後輩君、誰？」

「知らない子です」

「ちよつと、1週間前にあったじゃない!!」

「知らんな」

「ううう!!」

「唸るな」

「後輩君、ドS？」

「誰がドSだ」

「ねえ……」

小娘……じゃなくて目の前の女性が話しかける。

「あんた、放課後屋上に来なさい！」

先輩、告白じゃないと思うで背中をつねらないで痛いから。

修羅場………さらば!!

——休み時間——

「おい、聞いたぞ！告白されるだろう!!」

「誰から聞いた」

「もう、噂になっているぜ」

「そうか、廊下で大声で言ったからな」

「で!!誰を選んだ!?!」

「え、その前に屋上に行くか悩んでるし」

「はあ!?!」

「面倒だし」

「コイツ……マジか」

健太の奴、俺を人間じゃない目で見てやがる。

告白ねえ……

正直、あの【小娘】見た事ある気がする。

もちろん、元の世界で。

まあ、昼休みに先輩と考えるか。

——お昼休み——

「で、先輩。屋上に行った方がいいですかね?」

「ふーん」

「……あの先輩」

「ツーン」

「自分で言うのか（小声）」

「私は怒っています」

「あ、はい」

「理由わかるよね?」（ニッコリ）

「うわあ」

ヤダこの先輩、めっちゃ怖い。

ええー、別に普通の相談だったのに。

これを言っても聞いてくれないよな〜

「一応、言いますけど告白なら断りますよ」

「え、そうなの?」

「はい」

「そっかー」

「そうですよ」

良かった。

謎の圧が消え、先輩も安心そうにする。

「あ、でも屋上には行こうかなって考えてます」

「はあ?」(謎の圧再び)

「ヒエツ…」

「先輩君……ギルティ……」

「えっと……あ、分かった!」

「何かな……?」

「先輩も一緒に屋上に行きましょう!」

「え」

――放課後――

放課後になり、先輩を呼ぶため先輩のクラスに行く。

先輩を迎えてから屋上に行く予定だ。

「先輩〜迎えに来ましたよ」

「ふえ!?こ、後輩君!」

先輩が動揺な返事をする

「「キヤーキヤー!」」

先輩のクラスの女子が叫び

「「チツ!!」」

クラスの男子が舌打ちをする

なんだ、この地獄は……

というか、舞先輩も叫んでるな。

先輩も先輩で顔が真っ赤だし。



フォロー出来ない状態だ。

仕方ない……

「ほら、行きますよ」

「え、ちよつと！」

先輩の手を取り屋上に向かう。

後ろの教室が更に騒がしくなったが気にせずに向かうのであった。

――屋上の前――

屋上に向かったのだが、屋上のドアの前に小娘がいた。

「待っていたわよ!!」（ドヤツ）

ドヤ顔でスタンバイしていた。

先輩も顔真つ赤で未だにフリーズしている。

「ほら、先輩着きましたから正気に戻って下さい」

「え！あ、うん！」

そう言い、俺が先輩の手を離す。

「あ………」

……残念そうな声なんか聞こえない。

さて、本題に入るとするか。

「なあ、なんで俺を呼び出した？」

「あなたの【左腕】に興味が湧いたのよ!!」

「……やっぱりか」

まあ、そうだろうな。

SCP財団も興味があったみたいだし。

まあ、告白じゃない分いいだろう。

「だから、この私と付き合って貰うわ！」

「いや、なんでだよ」

余計な事を!!

ほら、見ろ!!先輩の殺気が!!

「そ、そもそも！お前の名前さえ知らないだぞ！」

「あらそう！私の名前は りっか 立花 あい 愛！そして、アンタの隣のクラスよ

!!さあ、私と付き合いなさい！」

「あれループしてる?」

「後輩君……?」

「ヒエツ……とにかく付き合えないから!!」

すると、俯きブツブツと何かを言い始めた。

「……………だ」

「え」

「嫌だ!嫌だ!嫌だ!嫌だ!嫌だ!嫌だ!嫌だ!嫌だ!嫌だ!」

この小娘、無理だとわかった途端に駄々をこね始めた。

先輩もこれは予想外だったのだろう。

啞然としている。

「というか、お前に聞きたい事がある」

「嫌だ!嫌だ!嫌だ!嫌だ!嫌だ!嫌だ!」

「……………続けるぞ」

「この状況で会話を続けるの後輩君!」

「お前さ……………」

「嫌だ!嫌だ!嫌だ!嫌だ!嫌だ!嫌だ!」

「中二ぐらいに【奈落の悪鬼・黒き翼の墮天使アイスヴァイン】って名乗ってなかった?」

ピタツ!!

あ、この反応はやっぱり。

男子はかっこいい物には目がない！JKは知らん

これは俺が財団にいた時の話だ。

仕事の内容に財団の書類を博士と共に整理するという業務があった。ただただ、捨てる書類と残す書類を分けるだけだった。

暇だった博士が「ドキドキ！書類暴露大会!!」という謎の企画が始まった。

ちなみに、書類の中にはミーム感染の可能性がある物もあったらしい。

様々な書類を読み上げる博士。

色々なSCPについて読み上げる博士。

【ぜんまい仕掛け】・【批判的なトマト】・【手描きのキャッシュ】・【パッチワークのハートがあるクマ】等の報告書を読み上げていく博士。

そして……………禁句に触れたのだった。

『えっと、お次は……………ぶふっ!!』

『ちよっ！博士!!気になるって!!』

『【奈落の悪鬼・黒き翼の堕天使アイスヴァイン】だってWWW』

『WWWWWWWWW』

『記録映像もあるぞWWW』

『中二病観察映像WWW』

『アイスヴァインWWW豚の塩漬けと同じWWW』

『WWWWWW』

『どうしようWWW財団が本気で調べてるWWW』

『は、博士WWW腹が痛いWWW』

『あ、魔導書（仮）のコピーがあるWWW』

『魔導書（仮）WWW』

『よし、読むぞ!!』

ドゴッ!!

ドサッ……

見上げると博士が倒れていた。

『……………え、博士?』

返事がない。

気絶しているようだが。

そして、いつの間にか女性エージェントがいた。

そのエージェントは血がついた鉄パイプを持っている。

『見たな……………』

『え』

ドコツ!!!

その後については、全く記憶にない。

ただ、目覚めたら医療室におり傷は浅いようだった。

博士も気絶で済んだらしい。

その後、また書類分けの仕事に戻ったのであった。

しかし、あの報告書はどこを探してもなく、消えていた。

——現在——

ピタツ!!

いきなり駄々をこねるをやめた小娘。

やっぱりか…………

見た事があると思っていたが、あの時だったか。

そう思っていると……………

ガシツ!!

小娘がいきなり胸ぐらを掴んできた。

「あ、あんた!どこでその名前を!!!」

「……………」

「何か言いなさいよ!」

「えっと、後輩くん。さっきの墮天って」

「アンタは黙っていて!」

「……………魔導書(ボソツ)」

「!?!」

「アイスヴアインは別名【豚の塩漬け】（ボソツ）」

「……………」

「えっと……………」

ふむ、色々と言ってみたが反応がないな。

そう思っている」と

「ふえええええええ!!」

」

泣いた。ガチ泣きだった。

見た事あるぞ、このパターン。

ガシツ!!!

「後輩君？」

「ヒエツ…ち、違うですよ！わざとでは無いですね！」

「とりあえず、正座しようか」

「理不尽だ……………」

——数分後——

「……………」

「……………」

「な、何よ!!もう泣いてないだから!!」

あれから数分、泣き止むまで正座させられ先輩に説教をされていた。

そして、小娘は泣き止むと俺に威嚇してきた。

「ごめんね、後輩君が……………」

「先輩、謝らない方がいいですよ。自分の黒歴史で泣いた人ですよ」

「うう!!」

「後輩君!!言い過ぎよ!」

「事実なのに……」

また、泣き出そうとする小娘。

全く、面倒な……

「ごめんって」

「……………なさい」

「うん？」

「覚えておきなさい!!もう許さないだから!!」

そう言い、立ち去って行った。

「……………帰りますか」

「……………そうだね」

こうして、まあ無事?に解決するのであった。

「そういえば、後輩君の左腕ってどういうこと？」

「ああ、自分の左腕はこうなっているですよ」カチカチカチ…

「そんなあつまり見せちゃうの!？」

「カッコ良くないですか!!」

「ええー、これカッコイイかな？」

「先輩、ロマンを分かってないですね」

「そうかな？」

H A H H A、トマトじゃーん

ーあれからー

その後、あの小娘からは睨まれるようになったが、まあ問題は無いな。

別に恨まれる事をしていないから大丈夫だろうな。

……まあ、いいや。

学校も普通だし、危険って訳では無いからな。

そして、今日もグダグダと過ごしていた。

「はい、という事で明日から夏休みです。あんまり羽目を外しすぎないようにね」

「「やったー！夏休みだ!!」」

学生らしいイベントだ。

ここで宿題を一気にやる派、最後にやる派に別れてくる。

ちなみに、俺は最初にやる派である。

「はい、宿題も配るぞ。忘れるなよ」

「「ええ〜」」

「はい!!宿題は先生に預けるので夏休み終わったら取りに行きます!」

「という訳で、健太は宿題を倍にします」

「なぜ!?!」

当たり前である。

ー放課後ー

「ねえ、アンタ夏休みの予定あるかしら」

「なんで、うちのクラスにいる小娘」

「小娘って言うなし!!」

休み時間、15分という短い時間だというのに全く……

「で、夏休みの予定だっけ?」

「ええ、そうよ!」

「うーん、忙しいかな」

「あら、そうなの？」

「ああ、何せ……仮面ラ○ダーを一気見するからな」

「暇じゃない!!」

「暇じゃないわ!!」

キンコーコンーカンコーコン

「ああー、また来るからね!」

「もう、来るなよ……」

ああ、俺の休み時間が………

――放課後――

「じゃあ、夏休みだが怪我や事故がないように」

「二はーい!!」

「ふむ……」

始まってしまいう夏休み……

とりあえず、帰ったら予定を決めるだけだな。

「なあ、廻!夏休みどこに行く!」

「テンション高いな、そうだな海には行ってみたいな」

「お、いいじゃん!一緒に行くこうぜ!」

「まあ、いいけど……後はバイトもやりたいな」

「バイトか……」

「まあ、今すぐって訳じゃないけどな」

「そっか!じゃあ、これが俺の電話番号な!」

そう言い紙を受け取る。

俺もノート1枚破り、孤児院の固定電話の番号を書く。

「ほい、これが俺の番号な」

「お、サンキュー」

「ただ、携帯持ってないから家の電話だけだな」



「お、わかった」  
「そう言い、俺たち別れた。」

「ちよつと！アイツいないじゃない！」

――孤児院――

「ただいま」

「二「あ、おかえり！お兄ちゃん！」」

「あら、もう終わったの？」

「ああ、先生。明日から夏休みだからね」

「そうなのね」

「という訳で、さっさと宿題やってくる」

「そう言い、自分の部屋に向かう。」

「部屋に着くと、カバンから今貰った宿題を出す。」

「さてと、元Dクラス職員の見えますか！」

（※Dクラス職員は死刑囚です。頭がいいとかは関係ありません）

――2時間後――

「ふう、まあ今はこんなもんだろう」

【高校1年生用の問題集】◎

【読書感想文】◎

【自由研究（色が変わるドリンク）】◎

「で、これが厄介だな……」

【夏休み日記】

「……………なんか植物でも育てながら書くか」

宿題はほぼ終わったが日記に関してはコツコツやっていくしかない。

そう考えているとドアの向こうから、ご飯だよ!!という声が聞こえる。

まあ、ご飯を食べながら考えるか……………

「という事で、なんか植物の種ない？」（モグモグ）

「コラ、食いながら話さないの」

「あるとも！廻君!!」（モグモグ）

「ブライト先生も食べながら話さない!」

この後、先生に怒られるのである。

というか、ブライト博士……

一応、先生なんだから食いながら話すなよ……

――食事後――

現在、俺はブライト博士の部屋に来ていた。

博士の部屋は、書類や変な道具で足の踏み場もない状態だ。

片付けろと言われているらしいが、そのままらしい。

「で、どんな植物なんだ？」

「まあ、普通の植物だよ」

そういい、そこら辺の棚から袋に入っている種を渡してきた。

見た感じ、確かに普通の種だ。  
ただ……………

「で、何の植物なんだ？」

「え、さあ？忘れちゃった」

「よし、表出ろ」

「なんで!？」

絶対、普通じゃないな。

### 【日記】

○月×日

今日は、庭に何かの植物の種を植えた。

何かは分からないので、育つのが楽しみである。

子供たちも一緒になって手伝ってくれた。

子供たちも楽しみらしい。

○月△日

今日は子供たちと公園に行った。

子供たちは元気よく遊んでおり、高校生なのに一緒に遊んでしまった。

そこはいいが、最終的に泥だらけになってしまい怒られる羽目に……

後は、子供たちと植物に水をやった。

○月□日

今日、植物の様子を見ると既に芽が出ていた。

……きつと、元気に育ったのだろう。

子供たちも喜んでいた。

まあ、後ろで先生の一人が変な薬品が入っていきそうなビーカーを持っていたが…

○月☆日

今日も子供たちは元気です。

植物も……スクスクと成長しているかな？

今日は朝早くから子供たちに連れられてラジオ体操に向かいました。

久しぶりのラジオ体操だった。

○月♡日

今日も朝からいい天気です。

植物は、もう実ができておりトマトでした。

子供たちは、喜んでいました。

一人の先生は？って顔でしたが、一人の先生は何か納得して頷いていました。

………確信犯だな

○月%日

………どうしよう

普通のトマトじゃなかったわ。

事件は一人の先生が冗談を言った時だった。

いきなりトマトが先生に向かったのだ。

そして、そのまま顔にシュート!!だった。

俺たちは、呆然としました。

パタツ……

「ふう……」

俺は日記を一旦閉じてため息をする。

あの博士、植物は普通だったのに薬品をぶっかけやがった。

おかげで、トマトが普通のトマトでは無くSCPになりやがった。

ノリで日記にしたが、冗談って事で片付けられるだろう。

子供たちは、トマトが飛んできた時は笑っていた。

とりあえず、あのトマトは今後も育てていく予定だ。

まあ、冗談さえ言わなければいいのだから。

「まあ、明日看板を立てるか……」

「このトマトの前で冗談言うの禁止！」

「なお、言ったら責任は取りません！」

同類・・・居たんだ

ここは何処かの研究室。

研究室には紙が散乱しており電気も付いておらず暗いままだ。

そんな場所で一人の男がパソコンに向かって何かの研究をしていた。

カタカタカタ……………

「ダメだ……………」

カタカタカタ……………

「これじゃダメだ!!」

ガシャン!!!

男は打っていたパソコンを掴み投げる。

大きな音を立てるが、周りに音が消えるだけだった。

「ねえ」

男は振り返る。

誰もいない、自分しかいないはずの部屋に誰がいるのだから。

「誰だ！お前は！」

「誰だっていいじゃない。それより……………」

その誰かは男の資料を見てこう言った。

「【力】欲しくない？」

男は自然と唾を飲み込む。

その誰かの目は、「ぜんまい仕掛け」のように動いていた。

カチカチカチカチカチカチカチカチ

「ああー、こんちくしょうー」

どうもー、前回の博士が原因で絵日記が最初からになった男だよー

「あのバカ博士め……………」

要らん薬を投入しやがって……

おかげで、あの畑は封印だ……

「ああー、暇だ……夏休み……」

ガチャ！

「暇そうな、そこの貴方！」

「勝手に入ってくるな、ブライト博士<sup>黒幕</sup>」

「そう言わずに!!ほら見てこれ！」

ブライト博士はチケットを持っており見せてくる。

「ジャーン！これを見に行こうよ！」

「パス」

「なんでそんなこと言うの!!」

「どうせ、ろくな事じゃないからな」

「いいじゃん！いいじゃん！」

「やめろオ！服を引っ張るな！離せ！」

ヤメロー!!ハナセ!!

「暑い……」

「ふふん!!楽しみだね!廻君!!」

結局、行く事になった。

シスターに怒られて付き添う感じだが……

外はセミがうるさく、夏らしさを感じる。

「うるさい………というか今からどこに行くんだ?」

「ああ、私の後輩が研究発表会だ。なんでも自信作らしい」

「興味ねえな……」

そう言いながら、歩き続ける事15分………

「どうやら、ここのようなだね」

着いた場所は、小さな会場であり人もそこまで来てはいないようだ。

看板には【科学研究発表会】と書かれている。

「案外、普通だな」

「まあ、派手ではないだろうね」

そう言いながら中に入る。

会場は舞台があり、舞台の周りに様々な作品が並んでいた。

大人から子供までの研究物が並んでいた。

「廻君は、自由に見て回って来ていいよ。僕は他の学者と話をしているからね」

「OK把握」

そう言い、俺はそこら辺を見て回る事にした。

作品は様々であり、気になる物もあれば、あんまり気にならない物もある。



「……………やっぱり興味ねえな」

ブラブラ歩いていると、ある表が目止まる。

「…舞台発表一覧ね」

何故かそれが目に止まる。

書かれている事は普通なのに目に止まる。

「ねえ、君」

声をかけられたので後ろを振り向く。

そこに居たのは【普通の少女】だった。

髪はショートヘアで眼帯をしている事以外は普通である。

「…なんですか？」

「いやね、なんか興味があつてここに来たのかなつて」

「いや、付き添いつて感じてここに来ましたね。」

「そうなんだね!!」

そう言い、彼女も表を見る。

「ねえ、この発表つて面白そうじゃない？」

見てみると、「改造と対等について」と書かれている。

いかにもつて感じである。

「……………いや、やっぱり興味ねえな」

そう言い、彼女の方に顔を向けると誰もいなかつた。

「お、廻君。見て回ったかい？」

一通り見て終わった俺はブライト博士と合流する事になった。

とは言つても、博士も人と話して終わった感じだが。

「まあ、一通り見たけど興味がねえ……………」

「そうだろうね。ここには頭が硬い奴しかいないからね。」(ヤレヤレ)

「じゃあ、なんで連れてきた」

「暇そうだったから」

「ギルティ」

「……しばらくして……」

俺たちが一通り見て周り終わり端っこにあつたイスに座っていた。

「お、そろそろかな」

「なんの事だ？」

「最初に言っていたじゃないか。後輩の研究発表だよ」

そう言いながら、ブライト博士は舞台を見る。

舞台では、なんかよく分からない研究の発表をしているが、博士はつまらなそうに見ている。

「あの後輩はね、よく僕に喧嘩を売ってきたんだ」

「うわあ、そいつつて変態の極みじゃん」

「それって、どゆ意味だい？まあ、いいや」

「いいのかよ……」

「続けるけど、その時は興味無かったけど最近になって気になってしまっただけ」

「ふーん、珍しい事もあるんだな」

そんな会話を続けているとアナウンスが流れる。

「続きまして、▲▲▲博士の研究発表【改造と対価について】の発表です。準備を致しますのでしばらくお待ちください。」

「お、廻君。どうやら次らしい」

舞台を見ると、次の発表に向けて準備をしており、布が被された機械が登場した。

大掛かりな機械なんだろう、大人5人ぐらいで機械を舞台中央に押し  
ていた。

………なんだろう。凄く嫌な予感がする。

そして、舞台にブライト博士の後輩であろう人で登場した。

髪はボサボサで白衣を纏っているが、両腕が無かった。

その博士を見た瞬間、周りがざわめいた。

「アイツ、腕無かったか？」

ブライト博士がそうつぶやく………

結構、動揺しているように見えた。

舞台の男が助手ぽい人にマイクを付けさせてもらい話を始める。

『どうも、初めまして。これから私の研究発表をしていきます。私の自己紹介やテーマ紹介等は全て省いて、この機械を説明させていただきます!!』

そう言いながら、男は中央にある機械の布を引いた。

カチカチカチカチカチカチカチカチカチカチカチ

『これぞ！私が開発した!!』

カチカチカチカチカチカチカチカチカチ

『ぜんまい仕掛けです!!』

俺は……………俺は動揺してしまった。

動揺して、俺は……………

「せい!!」

展示されていた「スライム」を投げってしまった。

そして、そのスライムは、ぜんまい仕掛けのぜんまいの隙間に入り……………

ギチギチギチギチ!!!

変な音が聞こえると……………

プシュー

ぜんまいが止まり、白い煙が出た。

『わ、私の研究成果がああああああ！』  
あ、やべえ

とりあえず、言い訳ください

拝啓、施設にいるシスターへ

今は何をしているでしょうか？

私がいる場所は様々な展示物があり、暑さを実感します。  
そして、今から熱が上がりそうなのです。

『そのクソガキイイイ!!お、俺の研究成果をおお!!』  
『ちよっ、落ち着いてください!』  
『黙れええ!!』

助けて

-----

「ええー、大変長くお待たせ致しました。▲▲▲博士の発表は機械の故障の為に次の発表をさせていただきます」

アナウンスが聞こえてくる。

中央にあった機械も無くなっており、別の研究物が用意されている。

今、俺たちは会場の外にあるベンチに座っていた。

まあ、ブライト博士は笑いすぎて倒れているが……

「お、俺の研究成果が……」

「ブブツ!!」

「ブライト博士、これ以上笑ってやるなよ……」

「元はと言えば！貴様のせいだろうが！」

そう言いながら、俺に顔を向ける。

仕方なかったと言えば、それで終わりだがそれだけではダメだろうと思った俺は謝るべきだろう。

「という訳で、すみませんー」（棒読み）

「貴様!!謝る気ないだろう!!」

「ブブツ!!」

「ちよっ、貴方も笑わないでください!!」

「あ、助手ぽい人、居たんだ」

「いましたよ!?後、助手です!!」

「貴様ああああああああ!!」

「アツハハハハハ!!」

もはや、カオスである（遠い目）

――10分後――

「ハア、ハア、ハア……」

文句を言っていた博士も落ち着いたのでろう……

今は息切れをしており、項垂れていた。

全く、誰のせいやら……

「そういえば、聞きたい事があるんですけど少しいいですか？」

「ああん!？」

俺がそう聞くと睨みつけてきた……

まあ、いいや。

「あの機械……誰にお願いしたんですか？」

そう言うと、動揺したように立ち上がり俺に怒鳴りつける。

「な、何を言っているクソガキ!!あ、あれは俺が作ったに決まっている  
だろうが!!」

「そんな言い訳どうでもいいですから」

「違う違う違う!!あれは私が開発発明したんだ!!」



否定してくる。

自分が、自分じゃないと作れない物だったと言い張る。

まあ、逆に言えば俺は作ってないって俺は聞こえるけどね。

クスクスク……

その後、俺たちは解散したが、▲▲▲博士は最後まで「自分が作った!!」って言い張っていた。

その帰り道にブライド博士が聞いてきた。

「廻君……なんで私の後輩が作ってないと思うだい？」

「そりやそうだろう……そもそも両腕がない人間があんな細かいの指示だけで作れるはずもない。」

「確かにね、わかるけれども」

「後は、あれは存在しちゃいけないから……」

「それはどういう意味だい？」

【そのままの意味ですよ博士】

俺がその質問に答えようとすると、別の声が聞こえ、目の前に会場で会った少女がいた。

【やあ、先程の会場ぶりですね】

「やっぱり、アンタの仕業か……」

「……この少女が」

【とは言っても私たちは依頼品を作っただけですけどね】

「依頼品？」

【ええ、そうですよ博士。彼は私達に誰も研究していない物が欲しいって言われただけです】

「よく言う……」

【うふふふ……】

目の前の少女から目が離せない……  
というか……

「というか、何しに来た……」

【そんな警戒しないで下さい……同族なんですから……】  
そう言い、少女が目を見せる……

少女の目は廻回っていた。

ゼンマイ仕掛けのように……

【これでわかりましたか？同族さん】

「……なるほどねえ、というか俺の情報はどこから？」

【ふふふ、企業秘密ですよ】

「廻君……君達は一体？」

【まあ、話を戻すと今回は君の勧誘です】

「俺の勧誘？」

【ええ、是非私達の組織に来ませんか？ただし、全てを捨てる事になりますけど…】

少女はそう言いながら俺に手を差し伸べる。

「廻君……？」

ブライド博士も心配そうにコツチを見てくる。

「俺は………辞めとくよ」

そう言う少女は差し伸ばした手を下げた。

「俺はまだこつちが楽しいから」

そう言い少女を見る。

少女は以前真顔で手を引っ込めた。

【そうですか……まあ、今度誘うとしましょう】

「いや、お断りだけど」

【まあまあ、そう言わずに】

少女は笑う。

ただただ、笑う。

【ではでは、私は去るとしましょう】

「おう、帰れ帰れ」

【あ、その前に名刺を渡しますね】

「え、要らねえ」

【そう言わずに】

そう言いながら、俺に名刺を渡す。

要らないが持つていても損は無いだろう。

【では、縁があったら会いましょう】

少女が消える。

まるでカゲロウのように……

「さてと、帰りますかブライド博士」

「え、この流れで帰るのかい？ちよつと色々と質問させてよ!!」

「だが断る」

「何故!?!いいじゃんか!!」

「いいから、帰るよー」

俺たちは何もなかったように帰る。

それが1番だから。

アイツらに関わらないように……

有限会社

如月工務店

名前：■ ■ ■

■ ■ ■

電話番号：○ ○ ○ — ○ ○ ○ — ○ ○ ○ — ○ ○ ○

こつちに投げるなあああ!!

夏休みも中盤。

最初の頃は様々なことがあったが、それ以来何もない。  
日記も順調であり、平和な日々だ。  
さて、そんな俺は今は……

「うーん……バイトどうしよう?」

バイトを悩んでいた。

「ダメだ……いい短期バイトが見つからない……」

1週間で3万円以上なんて条件は流石に贅沢すぎるか……  
やっぱり、普通のバイトを探すか……  
そう思い、求人情報に再び目を通すと……

【なら、私のバイトをやりませんか?】

【ヤツ】が窓から覗いていた。

「うわああああああ! チエンジ!!」

【あら、荒々しい。いきなり雑誌を投げるなんて】  
「うっせい!! いきなり現れたら雑誌も投げるわ!!」

コイツ!!マジでびっくりしたぞ!?

「というか、なんでここがわかった？」

「ああ、それでしたら、あの後に消えたように見せかけて尾行しました」

「うわあ、ストーカーだ」

「失礼ですね。それほど愛があるって言って欲しいですね」

「黙らっしゃい。【お前ら】の愛など要らんわ」

マジで【コイツら】の善意は要らない。

特に【コイツら】の

【ボランティアさせて！】

【共感して！】

【友達になろうよ!!】

等の言葉は聞かない方が身のためである。

「で、バイトだっけ？」

「あ、そうでした。バイトですよ」

「……時給は？」

「そうですね……私のじっけ、げぶんげぶん。私のバイトですからね……」

「おい、今実験って言いかけただろ」

「1週間で20万なんてどうですか？」

「……20万？」

「ええ、20万です」

……20万だと!?

普通の高校生では稼げない金額だ。

それこそ、子供達や先生に色々と買ってあげれる金額だ。

「……はっ!? 正気を保て! 俺!! 逆にそれほど危険って意味だろう!」

【まあ、危険ですが……】

「ほらな!! やっぱりあぶな……」

【50万でどうですか?】

「是非やらせて下さい。お願いします」

無理だったよ……パトラッシュ……

【では、明日連絡するので……】

「俺、携帯持ってないけど……」

【仕方ないですね……私達が開発したスマホを渡しますよ】

「え、嫌だ」

【……50万】

「ありがたき幸せ! まさか携帯まで貰えるとは!!」

絶対GPSとか付いてるじゃん!!

持ちたくねえよ!!

【じゃあ、明日メールするのでよろしくね】

「……はい」

そう言っつて、【ヤツ】は帰っていった。

「ああ、地獄だ……」

そんな事を言いながら貰った携帯を見る。



見てもわかる最新のスマホである。  
様々なアプリも入っているが、使い方が分からん。

ブーブーブー

「げっ、メールか」

メールのアイコンをタッチしメールを見る。

-----

宛先：取音 廻（とおと まわり）

差出人：有限会社 如月工務店（■■■■ ■■さん）

件名：明日の予定☆

明日はここに集合だからよろしくね☆

ちなみに集合時間は10時からだから、遅刻したら罰ゲームしよう  
ね!!

場所：○○市の× × × 公園前

時間：10時まで

荷物：服やズボン等

PS：地獄じゃないよ、楽園でしょ？

「ひいつ!？」

メールを見た俺は周りを見渡す。

俺以外には誰もいない筈だ。

「いや、同じなら能力だってあるはずだ…」

とりあえず、明日の準備をして飯を食おう。

―――1日目―――

現在、俺は待ち合わせ場所にいる。

ただし、待ち合わせ時間15分前である。

「15分前行動は当たり前である。  
というか、遅れたら後がめっちゃ怖い。」

【あら、早いですね。待ちましたか?】

【ヤツ】が来た。

普通の女子の格好をしており、周りの男性を魅了している。

まあ、俺からしたら地獄の門のような存在だ。

「おう、待った」

【そこは嘘でも「いや、今来たところ」って言って欲しかったですね  
……】

「いや、だってほんと……」

【ああ、シヨツクの衝動で罰ゲームを……】

「いや、今来たところさ!!ハニー!!」

【ハニーは要りませんね】

「くっ、我慢だ我慢するんだ……」

【では、行きますよ】

「ハイハイ……」

そう言い、歩き始める。

「で、どこに行くのか聞いていいか?」

【ああ、目的地はすぐその空き地ですよ】

「空き地?なんでそこに?」

【まあ、着いてからお楽しみって事で】

嫌な予感しかしない……

そう思いながらも着いて行くのであった

【ここですよ】

「うわぁ、広い……」

流石は要注意団体、こんな広い土地を持っているとは……

【では、早速やりますか】

そう言い、【ヤツ】はカバンからフリスビーを取り出す。

「実験って、それか？」

【ええ、まあ遊び感覚でいきますよ】

「実験とは……」

そう言い、【ヤツ】はフリスビーを俺に投げる。  
すると……

フリスビーがいきなり、普通ではでない速度になった。  
そして、周りの石を切断している。

「はぁ!？」

俺は反射的にマトリックス回避をして避ける。

フリスビーはそのまま、奥に進み………  
壁に刺さる。

「………おい」

【はい】

「何が遊び感覚だ!!あれを遊び感覚で取れるか!!」

【惜しいですね……あと少して左腕を……】

「お前も狙っているんかい!？」

【もう一球、いきますよ〜】

「なんで、まだ持っているんだよ!？」

――3時間後――

【いや〜、楽しかったですね】

「逆に俺に向かって言うとは……嫌味か」

【はい!!】

「初めてだよ、ここまでの殺意……」

あれからフリスビーを投げ尽くしたので終了した。

ちなみに、あのフリスビーは一回投げたら異常性は無くなるらしい。

が、当分の間はフリスビーはコリゴリだ。

【では、明日もお願いしますね】

「……そうだった」

【ではでは、また〜】

これがあと6日か……

生きて過ごせるのかな……